
その怪物、誰が為に力を振るう？

怪人紳士サノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その怪物、誰が為に力を振るう？

【Nコード】

N7031S

【作者名】

怪人紳士サノブ

【あらすじ】

それは悲劇が招いた必然の出来事。
故にその者は逃れる術がない。
はからずも力を得た者、彼の結末は…

怪物の生誕（前書き）

どうもサノブと申します

初心者全開でいきます

読みにくいところとかあるかもしれませんが、そこはご容赦ください

また、更新不定期な為にノロノロと進みます

それではお楽しみください

怪物の生誕

人が既に寝静まっているであろう夜の町。

そこから少し離れた小高い丘に屋敷としか形容の仕様がなない建物が建っていた。

高くそびえ立つ塀に囲まれ、鬱蒼とした森すら敷地に入っていると、ころからこの屋敷の主は相当の資財を抱えてるのが容易に分かる。

屋敷自体も多少歴史を経ているのか、古くからその地に建っていたと言わんばかりの風格を漂わせ、雰囲気からしてお化け屋敷としても違和感がなかった。

そんな屋敷は夜の中でもハッキリと解るほどに存在感を放っている。

そんな屋敷の中ではあることが起きていた。

外観と違い、中は銃撃戦があつたのかひどく荒れ果てている。

廊下の床にはこの屋敷に勤めいたであろう使用人が床に紅い池を作り、横たわっていた。

そこを武装した男達が銃を構えて、事切れた彼らを見向きもせず、隊列を作りながら進んでいく。

他でもない、彼らがこの屋敷を襲撃したのだから。

彼らはまるで何かを探すようにしらみ潰しに部屋を開けていく。

——部屋に隠れていた使用人は命乞いをし、それをなに食わぬ顔で銃口を向けて命を奪いながら。

そんな中でこの屋敷の何処かにある隠し階段から降りた先にある何かの研究室に幾人かの人が集まっていた。

そのうちのまだ何処か幼さの残る少女は泣きじゃくり、執事と白衣を着た少女の母親が慰め続けていた。

「パパが…っパパがあ…」

「お嬢様…申し訳ございません…力が足りぬばかりに…」

少女が泣いていたのは、彼女の視線の先にあるものが原因だった。

そこには母親と同じ白衣を着た男性が、腹部を押さえて壁にもたれ掛かっている。

彼を少女の弟の少年が、付け焼き刃な応急処置を泣きながらしていた。

しかし、その甲斐空しく男性の顔色が悪くなるばかり。

そんな中、少年は声を震わせながら語りかける。

「おい…クソ親父…何勝手に死のうとしてんだよお…！」

「はっ…ただ撃たれた…だけだろうが…この、泣き虫が…」

白衣の紅い染みが広がるのを止めることが出来ないことに弟は絶望を感じていた。

男性は、息子から自分の妻に視線を動かして言う。

「すまないな…やはりこうなってしまった…俺はいいから…せめてお前らだけでも逃げるんだ…」

「そんなこと出来ません！」

「黙れ馬鹿…いいか？お前さんは、科学者である前に…母親だろうが…子供のそばにいて…やれんのは…お前さん…ただだろ…この地下室の…どっかに脱出口があるはずだ…ここに居る奴ら皆も早く逃げろ…」

息も絶え絶えになりながらも自分の家族、仕えてくれた者を死なせたくない想いが、男性の意識を繋ぎ止めている。

男性は己の息子の頭を力の入らぬ手で一撫ですると、傍らに置いていた銃を手に本棚のバリケードの前に少しずつ歩き始めた。

男性の言っていた脱出口を見つけた執事が他の逃れていた使用人達を進ませる。

ある程度逃がしたところでバリケードが突如爆発、吹き飛び、部屋を土埃が舞う。

「ぐああっ…！」

「！親父っ！」

それと同時に銃声が部屋に響き渡り、少年は父親が撃たれたところを見てしまった。

そしてもう一発の銃声。

「え？」

少年は己の腹部を見ると父親と同じ様に紅く染まって行く様子を眺めながら倒れ伏す。

「もうお願いっ！やめてええええっ…！」

「いやあああっ！」

「坊ちゃん…！」

自分の母の悲痛な叫びが、姉の悲鳴が、執事の自分を呼ぶ声が聞こえた。

SIDE???

「…がつ…」

冷たい床に崩れ落ちる

腹部の痛みと視界の中に自分から流れ出た紅い海で撃たれたことを理解した

最悪だ…

どうしてこんなことになったのか訳がわからない

何時ものように学校から姉さんと一緒に帰り

何時ものように使用人達と勉強して

何時ものように親父と喧嘩して

何時ものように執事と料理の勉強して

何時ものように母さんと医学について学んで

俺にとっての日常のサイクルを繰り返す筈だった

だがそれらは意味わかんねえ連中にぶち壊されてしまった

だんだん意識が遠のいてくる

ぼうつとする頭でも再び銃声が聞こえた

「――あ」

全く声が出ない

それでも叫びたかった

視線の先には、3姉妹のメイドの長女が皆を庇い撃たれていた

ドジを働く姉さんとワーカーホリックな親父に手を焼いてくれていた優しいメイド長だ

何故彼女が撃たれなければならない

彼女が肉の壁となった隙に執事が母さんと姉さん、残りの使用人を脱出口に逃がした

執事が倒れるメイド長を抱えて絶叫する

そうだったな…執事とメイド長は付き合っていたんだった

それを思うと己の無力を呪う

まるで黒子のような格好をした襲撃者達は、二人にゆっくりと近付いていく

それを何とか阻止したくて

でも、やはりまだガキでしかない俺は体が全く動かない

「――畜…生…」

そんな言葉を漏らすことしか出来なかった

「よう…死に損ない」

何かが這いずる音

力のこもらない、だが俺にとって聞き慣れた声が聞こえた

ゆっくり顔を向けるとそこには血塗れの親父がいた

そんなに死にかけてるくせに無理しなくても良いのにな

そんな言葉を返そうとして、口が動かない

「ちっ…俺の…方が…撃たれまくって…んのに…てめえは…もうダ
ウンか…貧弱め…」

うるせえな…こっちは中学生に成り立ての病弱もやしなんだぞこら

成人よりもっと早くに失血死しやすいんだよ

中学生嘗めんなアホ

「へっへ…今にも死にそうな…顔して…るくせに…まだ生意気…出
来んだな」

そう言つて親父は白衣の中から何かの液体が入った瓶を出した

「俺は…助からん…だがお前なら…こいつで」

吐血して一度言葉が切れる姿に涙が流れた

そんなこと言わないでくれ…

もう…やめてくれ…

「へへへっ…知ってるんだぜ…？…お前…俺を手伝いたくて…医者…目指してるってな…？…だったら…死なせて…やるかよ…」

「―――親父…」

「はあ…はあっ…っは…こんな馬鹿親父ですまなかつた…」

親父は謝罪の言葉を述べて俺の体の上で瓶を握り潰した

生きているのか、中の液体が俺の体に纏わりつく

同時に痛みが引き、体が癒されていく

それどころか自分の中から体が作り替えられてるような感じがした

「…適合したな…よかった…」

「お、親父…」

「…お前らの親父でいて…よかった…」

「あ…」

「ろくでなしな俺を…親父と呼んでくれて…」

目の前で、いつも人を小馬鹿にしたような笑いをする人が心からの笑みを浮かべてるのが分かった

「ありがとう」

親父の最後の言葉

それを紡いだとき銃声と共に親父の、父さんの頭は弾けた

「——あ…」

手を伸ばす

父さんだった人へと

だが、顔にかかった血がそれを現実であると

涙が、涙が止まらない

確かにろくでもない親だったさ…でも…

なれない手つきで応急措置をしたときに頭を撫でてくれたんだ

もつと生きてほしかった

なのに…こんな死に方ってあるかよ…

黒い感情が生まれる

体をさっきの液体が飲み込んでいく

心のそこから初めて憎んだ

使用人を殺し

メイド長を撃ち

父さんをてにかけた

あいつらを

全身が、全てが、飲み込まれた

「ぐう…ああ…あああっ！…がぁ…ガアア■ ■ ■ アア ■ ■ アア
ア ■ ■ ■ アッ！！」

この日

怪物が生まれた

SIDE 執事

メイド長の彼女を抱えて逃げ回った

しかし、肩を足を撃たれてもう走り回れそうに無い

彼女を抱えることも出来ない

「お逃げください…あなただけでも…」

「ダメです…そんなこと出来ません…それに…まだ助けなければならぬ人…」

まだ二人取り残されている

あの方達を助けなければ…

様子を見ようと物影から覗き

「そん…な…」

あの方が坊ちゃん目の前で…

主のために忠を尽くすはずの私が

彼女を優先させたから？

残酷な現実

だがそれだけでは止まらない

「くっ…！」

襲撃者達が坊ちゃんに迫ってくる

このままでは主どころか坊ちゃんまで失ってしまう

それだけは…！

しかし、事態が急変した

坊ちゃんを何かが包んでいく

なんだあれは…

主が彼を治療するのにアレを使ったのは分かるが、アレにはあんな形状になるほどのことは無いはず

襲撃者達ですら異様な光景に戸惑っているようだ

一体坊ちゃんの身に何が起きているのだ…

そして坊ちゃんを包んだその姿は少年の体躯ではなく2メートルを超える黒い怪物へと変貌していく

部屋に響く怪物の叫び声

いや慟哭といってもいい

四肢を着いた姿勢のそれは立ち上がり、襲撃者達を見下ろした

その姿は襲撃者達に対する憤怒を感じる

やはりあれは坊ちゃんなのか

そして不安定な肉体に入れ墨のようなダークブルーのラインが入り、大きな口を開け

「ガアアアッ！！」

「ううっ！」

口から衝撃と黒い極光が迸る

辛うじて開いていた目に映ったのは襲撃者達は光に飲み込まれて、
蒸発していく様だった

「ぼ、坊ちゃん…」

なんと言ったことだ…

主が言っていたことは嘘ではなかったのか

怪物はピクリと動くと上を見て再び極光を放つ

私はそれを見ていることしか出来なかった

変わり果てた坊ちゃんに恐怖してしまっていたから

そして血を流しすぎたのか私はその場で気を失ってしまった

S I D E o u t

夜が明けて、町が騒然となる。

それは、町の有名な屋敷が崩壊するという事態だった。

警察関係者は、その荒れ果てた屋敷を見て啞然としていた。

この事態は現場に箝口令を敷かれ、何があつたのかは屋敷の住人たちにしかわからない事となる。

少年や執事そして父親の無事を願っていた家族の前に現れたのは救急車に運ばれるメイド長と少年、執事。

無惨な死を遂げ、変わり果てた父親の姿だった。

かくして、少年は図らずも力を手に入れる事となった。

そしてこの事件から3年後に少年は再び力を振るうことになる。

怪物の生誕（後書き）

こんなテンションでこの話は進んでいきますね

登場人物達の名前は次話辺りからです

後は最初はこんなテンションではじまっちゃいましたが、チヨロチヨロギャグを取り入れていきたいと思います

それでは次話でまた会いましょう

復讐を願う者（前書き）

短いです

2話目です

ゆっくりしていいからね……！

復讐を願う者

町の中にある一軒家。

普通の家と違い、そこその大きさと広さ。

ある一室に眠る少年がいた。

まだ早朝と呼ぶには早い時間に目覚ましも無く機械のように目をさます。

直ぐにベッドから降りて、素早く制服に着替えていく。

乱雑に伸ばした髪をベッド横にある棚の上に置かれたヘアバンドで適当に結ぶ。

ふと棚に置いてある写真楯を見て呟く。

「親父、あれから3年たった…俺は高校生になったぞ」

彼の見る写真には古い屋敷をバックに撮った一家が写っていた。

それをしばらく見たあとに彼は荷物の入ったバックを持って部屋を出ていった。

階段に向かう途中の扉を叩いていく。

「姉さん早く起きないと学校遅刻するぞ」

中でドタドタとしたかと思うと何かが落っこちる音が聞こえ、中からニャアーツ！と悲鳴がする。

少年は溜め息をついてさっさと下に降りていった。

「あらくつちゃんおはよう 今日早いね」

「おはよう母さん早起きはいつものことだろ？」

居間に行くと彼の母親が朝食を作っていた。

少年はコーヒーを淹れてその場でトーストを食べていると隣の扉から慌てて誰かが現れる気配を感じた。

「あああうー！奥様申し訳ございません！空牙様もおはようございます！」

扉からメイド服を着た、少年より小柄な女性が大慌てで入り込んできくる。

「美冬さんもう少し落ち着いて入ってください…それと春樹さんはもう出勤しましたよ？」

「な、なんと！おいてかれてしまいましたか！空牙様お先に失礼します！」

少年、空牙の母親に誰かが先に出ていったことを聞くと、手提げバッグとトーストをくわえて大急ぎで走って行った。

それを少年、空牙と彼の母親は見送るが、

「あらやだ！美冬さんにお弁当を渡すのを忘れたわ」

「ああー…途中で帰ってくるのを祈るしかないね」

猛スピードで出ていった女性にそんなことを漏らす。

「母さんはしばらく休んだ方がいいよ　姉さんの弁当は俺が作っておくから」

「あらそう？なら少し眠ってくるけど…あ、くうちちゃんのお弁当は直ぐそこにあるからね」

「ん、ありがとう」

母親は眠そうにしながら上の階に登っていくのを見届けると空牙はいそいそと弁当を作っていくのだった。

SIDE 空牙

「ふう、これで完成と」

最後の卵焼きを盛り付けて蓋をする

壁にかかる時計を見るとまだ時間に余裕があるな

俺はおもむろに通学鞆からノートパソコンとファイルを出してある
調べものをすることにした

それは、親父の経歴や友人、仕事関係、その他諸々

何故こんなものを調べているのかというと目的はただひとつ

親父の敵討ち

いや、復讐か

あの襲撃で何人もの死者を出したが、火災なんて訳のわからない片
付けられ方をしたからだ

納得出来るわけがない

奴らは何かを探していたのは間違いない

誰かを人質にとるとか、そういうのではなかったから物だ

恐らく、親父が製作したあるものが原因かもしれない

親父は、母さんとともに かなりの腕の医者だった

様々な技術が進んだ今だがどうしても治せない病気、怪我、感染症などたくさんある

それを治すべく当時の両親はこつそりあるものを製作していた

ある人工生命体を人体に寄生、融合することで人の生命力を底上げし、人工生命体に初めから刷り込まれた“ 人体を強靱な肉体に作り替える ” という都合のいいものだ

その為に親父は錬金術を母さんは魔法なんて余計な知識まで学び、製作に挑んだのだ

そして恐らく俺の肉体に宿るある力

こいつが親父の製作した物の正体だ

確かに俺は昔、病弱でひよろひよろのもやしだったが…寄生されたせいでスポーツ選手顔負けの肉体に変わった

おまけに力も凄まじい

以前病院の壁を殴ったら穴をあけてしまい、院長直々に説教された完全に鉄人になってしまった訳だが、こんな要素があることに気付いた親父は絶対に医療の現場に使われないことをわかっていたのだろっ

母さんはそんなこと無いと思っていたようだが、そう思っていた矢先があの襲撃事件だ

こんな強靱の意味が病氣じゃなくてホントに肉体的な意味で強靱になるなら考えられるのは兵器とかの転用だろう

何より俺が激情に任せてなったあの怪物の姿

あれだけの力があればそういう目的に間違いない

ならば両親に対してアプローチのありそうなところとかないか探したが、そう簡単に見つからないものだ

もともと一高校生に出来ることなど限られていたがな

とりあえず怪しいやつを探してみるか

「くうちゃん見付かった？」

「うおっ！？姉さんか？」

「こんなに人の繋がりがあると探すの疲れそうだよねえ」

いつの間に姉さんが後ろに立っていたので思わずビクリとしてしまう

「そういう姉さんは何か掴んだのかよ」

「ダメだね…手がかりなし」

そもそも親父の復讐を一番に望んだのは以外にも姉さんだった

俺より2年早く襲撃者を差し向けた犯人の行方を追っており、俺が本格的に復讐を開始したときにその事実を知った

姉さんは優しい

だが、3年前から変わってしまった

自分の敵に容赦がなくなり一度、いじめの現場を見た姉が加害者を完膚なきまでにボコボコにしたことがある

「あぁっ！ジャム溢しちゃったぁん…ふええ…」

「このバカ女！なにしてんだよたくっ…俺が拭くからちょっと離れてて…」

ノートパソコンの電源を落として姉の不始末を俺が処分する

こんなばわばわしてどんくさい姉だがかなりの激情家で復讐の鬼なんだと思えない

それに俺としては姉さんにはその手を汚してほしくない

「あ！時間無くなってきたよくうちゃん！」

「あぁもう…姉さん先に学校行きな…俺が後片付けするから」

「ごめんねくうちゃん…ぐすっ…」

「だああ！何故そこで泣くし！ほれ弁当！さつさと行け！」

まったく…手の掛かる姉だな…

執事の春樹さんや美冬さんがどれだけ苦労したかよく分かる

「行つてきまあす！」

「あいよお」

バタバタと廊下を走る音が聞こえ、また思い切り転ぶ音とつえええ…と泣き声をする

どれだけ泣く気なんだ姉さんは…

「おっと俺もそろそろヤバイか」

すぐにバッグを鷲掴み、玄関に行く

玄関を出ると我が家のメイド3姉妹の三女の千夏さんが洗濯物を干していた

通学前の俺に気付き、わざわざ手を止めて声をかけてくれる

「空牙様おはようございます」

「ん、千夏さんおはよう秋絵さんはどうした？」

「秋絵姉さんは、美津芽様が忘れ物をしたのでそれを追いかけて行きましたよ？」

はあ…またか姉さん…忘れ物毎回多いよなあ

姉さんは馬鹿みたいに足が早い

拳げ句に姉さんは魔法を学んでいるせいで身体強化とかして走って
るに違いない

秋絵さんが追い付くか心配だ

おっと俺もさっさと急がないと

復讐を願う者（後書き）

とりあえずキングダムゾンしました

とりあえずこの物語の主役は、姉の美津芽ちゃんとくうちゃんこと弟のくうちゃん

暫くはくうちゃんが頑張っていくことになります

この二人の初期設定は二人は人狼 だっただけど結局弟があんな目にありました

二人の家は、母親と執事、メイド3姉妹が住んでいます

他の使用人達は逃げたor辞職しました

それにしてもこの姉弟はブラコンシスコンの危ない人なんだよなあ

ちなみにダークな感じな内容だけどちゃんとギャグもいれますからね

下手するとバッドエンドになりかねませんから頑張ってハッピーエンド目指しますとも

ただの復讐一直線も行きませんので、それを期待された方には先に謝っておきます

それでは次話にまた会いましょう

怪物は疾駆する（前書き）

3話目何だってぶあ

始まるよあゝ

怪物は疾駆する

SIDE 空牙

「なあ桐崎いちよお頼み事あんげどええか？」

「あ？またノート見してほしいのかよ」

「いつも悪いなあ」

つまらん授業を聞き流して昼休みに入り、弁当を食おうという時に友人の三浦俊彦が邪魔をする

こいつは毎回のよう授業を聞かないから、じゃあ学校来んなよなんて言いたくなる

というか終始寝てるからまずついていけないだろうなこのリリースントは

とはいえ友人の少ない俺にとっての腐れ縁とも言える奴の頼みを断るほど俺は心無い人物ではない

だから俺は、ノートを見せた

そう見せただけ

「き、桐崎ん？ノートを貸して欲しいんやけど…」

「んんん？俺は見して欲しいと言われたから見せただけだぞ？」

「お、お願いやあつ！これからは心入れ換えて勉学に励むから！」

体格がよくなって長身になった俺だが、三浦は俺より更にでかい

見た目丸つきし不良の癖に子供好きで将来は保育園に勤めることらしいが、お前絶対保育士なれないんじゃないかね？なんて常々思う

というか特攻服の方がすげえ似合う

とにかく、泣きついたり土下座したりとこっちが恥ずかしくなることをされる恐れがあるから仕方なくノートを貸してやることにした

「あ、ありがとおな！この恩は忘れへんからな！」

「何度その台詞を聞いたと思ってやがるんだか…あ、ノート汚すなよ？」

「なんやねんその言い方！俺を誰やと思ってんや！受けた恩は返すし、汚さへんわ！」

どうだか…

前は提出物のテキストに焼きそばのソースついてたってのにこの似
非関西人

いや、関西人なんだが都会暮らしのせいで関西弁がおかしくなったからな

一生懸命真似してるように聞こえてならない

とりあえずノートを借りれて小躍りしそうな勢いの友人は放っておいて弁当をつつき始める

やっとゆっくり弁当を堪能しようとしたのだが、俺の発達した聴覚に聞き慣れた足音が聞こえた

またあいつか…いつもいつもホントに懲りないというかご苦労な奴だ

「桐崎空牙あつ！三浦俊彦あつ！」

「げ」

「はあ…」

扉がぶつ壊れるんじゃないかという勢いで開け放たれ、近くで弁当を食べてた女子の集まりや、くっちゃべってた男子が目に見えてビツクリしている

が、現れた人物を見てああいつものことかと納得し元の状態に戻った

その人物はというとこっちに向かってズンズン歩いてくる

腕には緑と赤の腕章

それぞれには風紀委員長、生徒会長と刺繍されている

ツインテールのややつり目がかった瞳がキツとこちらを睨み、眉間の皺が更に寄る

おお、おおまさに鬼の形相ってやつですかあ？

「貴様ら…いい加減に髪を切れ！校則に違反してるとなんでしょうって
いると思ってる！」

「さあ？数えてねえし」

「三浦っ！貴様も髪型を戻して髪を切れ！」

「アホ、はいそうですかかっていうと思うたか！そんなことしたら地味になるやろ」

「こんの…！」

三浦、お前はリーゼントが無くて馬鹿みたいにでかいから目立つと思うぞ？

目の前のこのめんどくさい女は犬養龍音といって、俺の通う鏡宮高校の風紀委員長兼生徒会長あと魔法使い

この学校に喧嘩売った奴はこいつにメタクソに打ちのめされる

ビックリするぐらい喧嘩が強いので誰も喧嘩を売ろうとは思わない程だからな

なんか三浦と犬養が痴話喧嘩を始めたから俺は黙って弁当を貪るとしようか

「く、空牙君…」

「あ？藤嶺か…なんか用かよ」

リーゼントと暴力女から少し離れて飯をかきこんでいると後ろからやたらとおどした小っさいのが話しかけてくる

このなんか小動物みたいなのは藤嶺綾

この高校に来てからのまともな女子の友人はこいつぐらいだ

犬養はなんというか…

三浦の嫁だろ絶対

「あ、あのね…空牙君の為に弁当作ってきたんだけど…」

ああー…

いつも学校を抜け出してパン買ったりするからな

今日は久し振りに母さんの弁当だから行かなかったんだが

「今日は弁当あるんだね…」
「ごめんね？ 知らないよねこれ…」

なんだろう…

俺が今日弁当だから悪いのか？

俺の為に作ってきたのに食べてもらえないと思ったのか今にも泣き出しそうな上目遣いで見詰めてくるもんだから罪悪感が

「ああもう… 分かった分かった… そいつも食うからこっちに寄越せ」

「あ… う、うん！」

「鈍感やな」

「鈍感だな」

なのであの馬鹿二人は俺に生暖かい視線を向けてんだよ… 意味わかんねえけどなんか腹がたつな

S I D E o u t

放課後になるとそれぞれが帰宅していく。

空牙は藤嶺や三浦達とは別に違う道を通って帰宅。

空牙は部屋に荷物を置くと机の隠し棚から手のひらに収まる、長方形の黒いなにかを黒いバッグに入れた。

そのあとはファイルを何冊か取り出しては次々にバッグにしまいこんでいく。

黙々とそんな作業をこなしていき落ち着くと、制服を脱いでいく。

タンスの中を開くとほとんどが黒い服ばかり敷き詰められており、そこから必要なものをベッドになげだした。

全身を黒で統一服に着替えて再び別の黒いバッグを肩に掛け、玄関に向かう。

「秋絵さん、バイトに行ってきます」

「早く帰ってきてくださいね」

直ぐに近くの部屋から顔だけ覗かせたメイドに手だけで返事すると、彼は急ぐように家を出ていった。

「ちつ…親父め…無駄に顔が利く人間関係築きやがって…」

時間は日が沈んだ頃。

毒づく空牙は町の真ん中を歩いていた。

途中に電化製品店を通り過ぎようとして

「……」

彼は足を止めて、ショーケースのテレビで流れる番組を見ていた。

その番組では一人の男性が最近の医学について新たな技術の考案を唱えていた。

難病を患う人にとってその可能性に希望を与え、他の医者も画期的な方法に関心を抱くようなものだ。

だからこそ空牙はそれに違和感を覚える。

空牙はそれを食い入るように見ていたが、途中で早足である場所に向かう。

路地裏に入り、奥へ奥へと進んでいく姿はまるで自ら闇に溶けていくよう……やがて小さな土地に立つ廃ビルが姿を現した。

町の中だと言うのに光が射し込みにくい立地のせいかな、深夜ではないかと間違われそうに暗闇に包まれている。

今にも崩れそうなビルの立ち入り禁止の金網、空牙よりも高いその柵に彼は近付き、

「ふっ」

金網の穴に足をかけ、階段を登るようになってなんでもないといたように乗り越えてしまった。

柵の向こう側に音もなく着地すると、廃ビルの中に入っていく。

家で彼はバイトに行くと言っていたが、あれは半分嘘。

確かにバイトを入れているが、今日は非番なのだ。

ならば何故嘘をついてまでこんなところに来たのか？

廃ビルの階段裏、そこには地下へ続く小さな扉がある。

彼はそこに入っていた。

幾つかのランプをつけて部屋を明るくする。

小さな灯りが照らしたのは彼の父親の研究、人間関係、勤め先、その横のパイプ…ここには彼が復讐の為にかき集めた情報がそこかしこに敷き詰められていた。

「さて…またいつものように始めますか…それにしてもさっきの気がなるな…」

彼は呟き、ノートパソコンのキーボードを叩き始める。

全ては復讐の為に。

SIDE 美津芽

私は今、大学の友人に聞いたある話を思い出していた

内容はある男の出所

その男は外国の兵器を密輸とかをやっていた人間なんだが、8年前に捕まった

異例の判決により刑期は激減、そして先月出所したわけだが……どうもその人は密輸以外にも情報屋紛いのことを働いていたらしい

くうちゃんみたいにパソコンは得意じゃないけど、調べてみると過去のたくさんの事件にも関与したことがあつたらしく、警察や市政の情報を流していたのは彼との専らの噂らしい

ならば彼は、何か知っていそうだと思う

パパとママが始めていた例の研究は10年前から極秘とはいえ一大プロジェクトとして動いていたんだ

規模を考えると彼の耳に何かしら情報が入っているのかもしれない

どうにかして私は彼に接触したいのだが、

「ダメなんだろうなあ」

大好きなくちゃんこと空牙が、私がパパの復讐を企んでいるのを知らないや私を出来るだけ関わらせないようにするようになった
愛する弟をなんとか説得して理解してもらった

それでもあの悲しそうな目を思い出すと胸を締め付けられちゃう

またバカ女とか駄目女とか言って怒るよね…それでも私はもう止まれないんだよくちゃん…ごめんね…

「暗い気持ちになっちゃ駄目だ　今は考えないと」

彼の行方をなんとしても掴んで、話をするんだ

必ず…パパを殺した相手に報いを受けさせるために

SIDE空牙

接触出来そうな人物をピックアップし続けるとあの番組に出ていた人物が混ざっていることに気が付いた

どうやらあの男性は親父の大学生時代の後輩らしい

男性が医大の教授になった後に先輩後輩のよしみで親父を特別講師として講義に出てもらっていたようだ

あのときのテレビの発言に親父の研究との類似点がある

時期を見て会いに行ってみるか

「ん？もうこんな時間か」

現在時刻を見ると10時を回っていた

流石にそろそろ帰らなければ

帰り支度を整えて、しっかりと誰も入れないように施錠して隠れ家から出ていく

廃ビルを登って屋上に出ると俺は躊躇いなく隣のビルに向かって足を踏み出した

走幅跳びの選手を鼻で笑うような跳躍力であっさりと着地する

ホントに俺は人間やめちまつてるよなあ

まあ役にたってるし、お陰でもやしっ子から健康な体になったのは素直に感謝するがな

そうやって人の視界に映らないビルからビルへと飛びうつっているとある人物が視界に入り、足を止めた

「藤嶺…？あいつこんな時間になにやってんだ？」

一人で町中にぼつんと立つ小さな人影、茶髪がかったショートヘアにいつもの黄色い花飾りのついたヘアピンをつけた姿はどう見ても藤嶺だ

しかし、あいつはこんな時間に出歩くような不良少女じゃない

おまけに何故か制服姿と補導されそうな格好だ

と、スーツ姿の変な男とチンピラみたいなのが声を藤嶺にかけだした

「すげえキナ臭いなおい…ああくそつ…声が多すぎて聞こえねえ…」

町を行き交うカップル、酔っぱらい、不良ギャル、会社員…彼らの話し声全てが耳に入ってきて藤嶺達が何を話しているかわかんねえ

だが嫌な予感がする

売春ではないだろうが、いくらなんでも藤嶺にとってあまりいい話じゃないのは確かはず

と、藤嶺達が近くのワゴン車に向かって歩いていく

「…ちっ」

理由はどうあれ、ワゴン車に入れさせたくねえな

あれに乗ったら藤嶺が帰ってこないような気がする

俺は直ぐに裏路地に飛び降りた

「うわっ！な、なんだ!？」

「悪いな、おっさん」

路地裏にいたホームレスの目の前に思い切り着地、衝撃で地面のコンクリートが若干陥没したせいでホームレスのおっさんは腰を抜かしてしまったようだ

だが、おっさんに構っている暇はないので直ぐに走り出す

道行く人達の合間を一瞬で抜き去り、ワゴン車に乗り込みかけている藤嶺をすれ違い様に拐い脇に抱えて俺は逃げた

「ふえ？え？え??」

頭に沢山の？を浮かべた藤嶺は状況が理解してないらしい

まあ、変に騒がれるよりはマシ…なのか？

とにかく俺はスピードを落とさず疾走、十分以上ノンストップで走り続けて目の前に公園が見えたのでそこに入ったところでようやく

足を止めた

ベンチが視界に入り、俺はそこに彼女を降ろしてやる

未だに？が一杯の藤嶺の頬をペシペシ叩いて正気に戻してやった

突然回りの景色が公園に変わっていることに気づいて混乱する藤嶺にしゃがんで目線を合わせる

「空…牙君？」

「ああ」

「う、うええ…」

「えっ！？ちよっおま！」

何故かいきなり泣かれたんだが

一体何がどうなってるんだ…

怪物は疾駆する（後書き）

何とか3話目投稿完了しました

戦闘シーンとか期待される方はごめんなさい

マダマダサキナノデス

後はヒロインとか実はまだ登場してない不思議な状態なのさあ

姉はあくまで主人公の一人（しかし、まだ活躍は描かれず）

藤嶺はむしろマスコットキャラかも知れない…

そんな感じな話なので

それでは次話でまた会いましょう

怪物は容赦しない（前書き）

4 話目です

先に注意として今回は残酷な描写があります

気分を害した方は前ページに戻ることをおすすめします

怪物は容赦しない

SIDE綾

「落ち着いたか？」

「は、はい」

わ、私は夢でも見てるのかな…

く、空牙君と夜のベンチで一緒に居るなんて…こ、こころ、これは何だかイケナイことをしてるような妙な背徳感がっ！

「お、おい？なんかめちゃくちゃ顔が赤くなってんぞ…？大丈夫か？」

「え？あ、はい大丈夫ですっ！」

か、顔がっ！顔が近すぎるようっ！

こ、このまま近付かれたら私っ…！

「はあ…で？さっきのありやなんだ？」

「あ…」

彼の言葉にビクリと震える

さっきのいうことは空牙君に私が車に乗り込もうとしてたのを見てたのかな…空牙君は相手が誰であろうと他者に手を差し伸べる人だからたまたま私を見つけて助けてくれたんだ

なんて事情を話せばいいのかな…でも、空牙君を巻き込むことなんて出来ないよ

「話したくないこともあるんだろうけどよ…流石にあれを見たら誰だって心配する…お前一人で悩むんじゃない　俺がいるんだ力になってやるよ」

「そんなこと…出来ないよ…空牙君が危ないよ」

「悪いなあ友人を見捨てるような奴じゃないんだよ俺あ　抱え込んで苦しむような真似してっとドツボに嵌まって、帰りたいときに帰れなくなっちまうぞ？」

「頼っていいの…？」

空牙君は、優しく微笑んで頷いた

彼のそういうところが暖かくて、だから私は君のそんなところが…

私は勇気を出して彼に全てを話すことにした

「私のお父さんがね、勤めてた会社がいきなり別の会社と合併してね…その時に新しい本社に勤めてただけど…何だか会社が危ない仕事してるみたいで…お父さんが、辞めようとしても辞めさせてくれなくて…それで弁護士を通して裁判を起こしたんだけど」

「問題があつたのか」

「うん…弁護士の人が…亡くなったの…そのあと新しい人が入ったけど一方的に裁判に負けて、名誉毀損だつて賠償金を請求されて…そのあとに私のところに直接会社の人に来て、私の身柄を寄越したら不問にしてやるって」

「なん…だそりゃ」

あり得ないことに言葉を詰まらせながらも空牙君が憤る

その目には明らかに怒りが見えた

「親とは相談したのか？」

「出来ないよ…家は貧乏だし、弟と妹の養育費で一杯一杯だもん…」

弁護士を2回も雇っただけでかなりのお金を使って、お金をまた請求されたら一家離散の言葉しか浮かばなくなる

その事を考える度にまた涙が出そうになる

「…よし、絶対に俺が何とかしてやる」

「ふえ？」

「まかせろよお前を泣かすような真似しやがる馬鹿共は俺が蹴散らしてやるから」

け、蹴散らすって…

あれ？でもそんな光景を簡単に思い浮かべることが出来てしまう

「とりあえず今日は俺が家まで送るよ」

お、送るって！ふ、ふたりで隣を歩くってことで…こんな時じゃないきや満喫出来るのに

「おら、行くぞ」

ちよつと荒っぽく手を掴んでくる空牙君

私はされるがままにつれてかれるのだった

SIDE 空牙

俺はとりあえず帰り道に他愛のない会話をしながら藤嶺を送ってやった

家族の人に過剰なまでに感謝されて引いてしまったが

「藤嶺、お前の敵は全部俺が…」

言葉を飲み込み、二階から手を振る藤嶺にこちらも手を振り返す

それに満足したのか彼女は窓を閉めて引っ込んだのを確認するとバツグから一枚のシールを出す

こいつは姉さんが作ってくれた簡易結界を張ってくれる物だ

効果は悪意を持って近づく者に対して関心をなくさせるようになってる

それをポストの裏に張り付けて俺は再び町の中心地に戻っていった

俺の友人を苦しめる奴は全て俺の敵だからな…しかも随分めっちゃくちゃなことをしてやがるようだ

そういうゴミは掃除してやる

夜明けを拝むことさえできないまでに、な

S I D E o u t

町にあるひとつの企業が占有する人気のない駐車場に藤嶺が乗り掛けたワゴン車が駐車されており、複数の男達が先程の出来事に腹をたてていた

「くそがつ！なんださっきのは！」

「速すぎて何があつたのか分かんなかったな」

「ありや男だつたぜ？まだガキみてえだが」

「サツじゃねえみたいだったな」

「俺達の邪魔をしやがつたんだ…次にあつたら仕置きしてやる」

各々が口をしているときに一人が突然別のところに移動し始めた

仲間が何処に行くのか訪ねると煙草を切らしたようでそれを補充することを伝える

それを皮切りに他の男達も自分のぶんもと口々にいい放ち、その一人は使い走りにされてしまった

「たくつ…自分で買いにいけつての…」

ブツブツいいながらも素直に行くところから他の人物達にいいように使われてるのを彼は頭が悪いのか気付いていない

何時ものように人気のない路地から出ようとして

足を踏みとどめた

何かがいる…

彼は直ぐにそう感じた

気のせいなら未だしも、明らかに自分が狙われてるような程の気配がする

男は懐のロッドに手を掛けて辺りを見渡した

自分一人、誰もいない

しかし次第に冷や汗が出始める

自分の首に手を掛けられてるような気持ちの悪さだ

まるですでに蜘蛛の巣に捕らわれた羽虫の気分を味わう

男は自分を鼓舞するようにその場で叫んだ

「さっきから気持ち悪いんだよ！いるなら出てきやがれ！」

声だけが路地に鳴り響く

何も現れない、返事もしない…結局、暗闇に自分一人なのだ

あれはただの気の迷いだと結論付ける

肩透かしを食らったような気分を味わい、ロッドをしまう

そのまま煙草を買いに行こうとして

「ひっ！？」

別の路地から黒い何かが殺到する

液体のようで、糸のようで、だが鎖よりも頑丈な何か…それらが男をがんじがらめにして声を上げる間もなくその路地にとてつもない

力で引きずり込まれた

「あがつ！」

どれだけ引つ張られたのか、いきなり拘束が解けて地に投げ出される
数メートル転がされて、直ぐ様ロッドを出す

「な、なんなんだ…警察の魔法使いかなんか…？」

口に出してみても心が違うと叫んでいた

だったら拘束を解くなんて真似はしないはずだから

「ち、畜生…なんなんだよお…！」

急に理解できない事態に投げ出された男は携帯を出して先程の仲間に連絡をしようとして

「——あ？」

ひゅん、という音が聞こえたと同時に携帯の上部が弾けとんだ

次いで頬に痛みが走り、そつと撫でてみる

撫でた手は紅く染まっていた

冷や汗が再び噴き出す

連絡手段を失い、ただただ何かを通った暗闇を凝視する

すると一人の少年が現れた

少し癖つ毛のある漆黒の髪、切らずに伸ばした場所は適当に後ろに束ねているだけ、全身を黒一色に統一した今にも路地に溶けて消えそうな雰囲気だ

この時間にこんなところで少年がいるのはいくらなんでもおかしい
吸血鬼等の類だろうか？相手を分析しようとする

「おい」

「っ」

「お前らの会社がどんなのとか聞かねえ…ただひとつ聞かせろ」

「あ？」

「お前らがワゴン車に乗って何をしようとしてる」

こいつは、俺達がどういう人種かわかっていつてやがる

男の中で目の前の相手はやはり警察、もしくは関係者なのでは？という結論が出た

正体不明ならもつと疑うべきなのだが、そこまでは頭が回らないらしい

「ガキに教えるかよボケが！」

ロッドを振りかざし、果敢に男は挑んだ

相手は手ぶらなのだ、飛び道具は無い！そう勘ぐる

少年の頭上の降り下ろし、この頭をかち割ってやる！

ロッドは空を切った

「はあ？」

間抜けな声をあげてロッドを見る

ロッドの先端は捻切られていた

「…馬鹿が」

少年の声に顔を上げると拳が男の顔面を捉えた

メキリと嫌な音をたてて、男は無様に吹き飛び倒れ伏す

「あ、はがつ…鼻がつ…」

鼻の骨が折れ、大量の血を流してその場にうずくまるが、急に足をとてつもない力で踏み潰された

完全に骨の折れた音が、筋肉がぶちぶちと千切れる

次は背中を殴られた

潰れた蛙のような声を上げて地に伏し、肺の空気を無理矢理追い出されて呼吸一瞬止まる

脇腹を蹴られた

更に数メートル吹き飛び、痛みで体が動かせなくなる

内臓をやられたのか、吐血した

髪を鷲掴みにされて少年の顔の前に引っ張られる

「もう一度言う…お前は、お前らはワゴン車に乗って何をやっている？」

「た、頼む…助けてくれ…」

懇願し、己の保身を図ろうとしたことに少年の顔つきが陰しくなった

男の人差し指を掴むと思い切りへし折る

悲鳴を上げる前に地面に顔を押し付けられてくぐもった声しか上がらない

少し落ち着くと再び顔を上げられた

「つまらないこと言っ てんじゃねえ… 答えろ」

「ひいつ… 全部話す！だ、だから殺さないでくれ…！」

「……言っ てみる」

男は助かりたい一身で全てを明かした

彼らの仕事は子供の人身売買だった

藤嶺のように何かとこじつけ身売りさせて、外国の富豪、貴族、マフィアに奴隷として売り付ける

売り上げがよければ男達の給料が上がるのでこの上ない稼ぎだったこと

「ぜ、全部話した… だからもう…！」

「ああ、そつだな…」

胸に走る衝撃

男は視線を降ろして絶望した

少年の腕が、異形の形に変化して貫いていた

「な、なん……で……？約……束……違……」

「誰が助けてやるって言ったんだ？」

男の薄れる視界の中に少年の顔を見て驚く

まるで血のような紅い瞳の少年の顔

その半分が黒い液体に包まれて別の顔になっていたからだ

「か……かい……ぶ……つ……め……」

最期にそう吐き捨てて男は動かなくなる

それをなんでもないように見下ろしていた少年は腕を引き抜き、血を払った

顔の半分を別の顔と化していた少年、桐崎空牙は全身を液体に包んで完全に人ならざる者へと変貌を遂げる

『「人身売買か…ふん、外道畜生に相応しい最期を向かわしてやらねえとなあ」』

耳元まで裂けた大きな顎を開き、少年の名残を感じさせない声を響かせる

【『まずはあいつらも同じとこに送ってやるよあ…地獄で仲良くなあ』』

男の遺体を抱えて怪物は、ビルに液状の触手を伸ばして飛び乗る

そして、あのワゴン車のある駐車場へと彼は夜のビルを駆け出した

「なにやってんだあいつはっ！煙草を買うのにどれだけの時間がかかってんだよ！」

ワゴン車の周辺に居た他の男達は仲間の帰りが遅いことに怒っていた
リーダー格のスーツを着た男に限っては落ち着きを無くしている

「おいてめえ」

「なんスか？」

「あのバカの代わりに煙草買いに行けよ」

反論しようとしたが、強く出ることも出来ずに渋々彼は行くことにした

心のなかで罵詈雑言を並べながら歩き出して

「？なんだ？」

目の前に紅い液体が垂れてくる

上を見上げようとして

「え？」

ドチャリと、どこかで見た服を着た何かが地面に叩き付けられた

紅い液体を被り、鉄臭い臭いに鼻をしかめる

「どうしたよ？」

仲間の一人が来たのと同時に二人して口を抑えた

明らかに落ちてきたそれは、煙草を買いに行った男だったモノ

強く叩き付けられて原型を留めていない

「う、うわっ！うわぁあっ！！」

何がなんだかわからずワゴン車に向かって走り出す

「な、なんだこれ！？ううっ！？た、たすけっ」

「！？」

一人が黒いナニカに捕まり、暗闇に一瞬にして連れ去られる

「おい！なんだ今の声は？」

残りの仲間も先程の声の異常に気づき、暗闇から先程引きずり込まれた仲間が高速で飛んでくる

頭を砕かれた状態でワゴン車にぶつかった

「ガアアア……」

なんだとかいってる場合じゃない

暗闇から唸り声を上げながら思い足音を響かせて現れた存在に釘付けだから

暗闇から紅い眼光を放ち、大きな顎を開く

2メートルを超える怪物が目の前に現した

「『てめえら全員…俺が殺してやる…！』」

「う、うわああああっ！！！！」

リーダー格の男が拳銃を出して何発も放つ

しかし金属のように硬いのか、全て弾き飛ばされていく

「くるなあああああ！！」

「ガアア ■ ■ アア ■ ■ アッ！！」

裏路地にて肉を骨を潰す音が全て暗闇へと消えていった

怪物は容赦しない（後書き）

ぶっちゃけ戦闘でもなんでもないです

空牙君無双でした

ただでさえ超人になったのに怪物にまでなったらこれなんてチート？って思いますが、ただ比べる相手が悪すぎるだけです

チンピラの皆さん大変な目に遭いましたが自業自得といつかなんというか

ちょっと無理してエグい描写を入れたわけですが、やっぱり読み返すと未熟ですね…

まだ最初の方なのでこんなばっかですいません

…それにしても藤嶺ヒロインでもいいんじゃない？なんてたまに思っています

まあ、彼女の恋がどうなるかとヒロインは違うと俺は思うんでヒロインにならなくても藤嶺の恋はきつと報われると思います

たぶん

それでは今回の後書きはこちらまで

次話にてまた

三爪目は魔法を行使する（前書き）

5話です

姉さんのターンなのです

三爪目は魔法を行使する

SIDE 美津芽

アラームの音が鳴り響く

寝ぼけた頭で何とか右手を動かして枕元の沢山の目覚ましを片っ端から叩いて止めていく

アラームが無くなり何とか立ち上がろうとするが布団の暖かさに体が言うことを聞かない

ううん…まだ寝ててもいいよね？

しかし、私はそのまま情眠を貪ることは出来ない

「美津芽様？休日だからっていつまで寝ているんですか？もう昼になりますよ」

小さなノックに柔らかく、優しさの溢れる声

今、私の部屋の前にいるのはきつと春樹さんだ

正直、そんな風に言われると余計に眠りへと誘われる

「もう…一眠り…」

そして…再び私は夢の中へと…

「起きろよ…こんのバカ女あつ！」

「ひゃうつ！？」

いきなり部屋がドバーンツと開けられ、それはズンズンと歩いてくる

私は布団を頭まで思い切り被り、ガタガタと震えた

わ、私の安寧が今、壊されようとしている！

その恐怖に体を小さく丸まり縮こまった

どうせ、この守りは破られてしまう…ならば最後の悪足掻きでもして一秒でも長く夢の世界にっ！

「おらあつ！」

「ニヤアーツ！」

か、掛け布団がつ！ひつぺがされた！

外気にさらされながら視線の先には

「おはよう姉さん？」

「あ…う…」

とてもイイエガオの修羅がいました

何だか青筋らしきものがピクピクしてる気がするんだけど頭に血を上らせちゃだめだよ？

「春樹さんが起こしに来たのに何をしているのかな？ん？」

「で、でも！ちゃんと起きようとしたよ？ちゃんとアラームが鳴って、それを止めて布団から出ようとしたよ？」

「…アラームを昼に設定するのか？」

「え、あ、だってほら今日は休日だし…今後のために英気を養おうと…ね？」

丸まりながら可愛く弁明することで何とか修羅からいつものくうちやんに戻そうと試みる

更に潤んだ上目遣いで見詰めることで可愛さが三割増しにつ！

どうだ！？これで落ちぬ弟は居まい！？

が、無言で腕を掴まれる

「く、空牙さん…？何をしてらっしゃるのでせうか？」

「調教」

「ちょ、調教つて…」

…くうちゃんになら調教されてもいいかも…なんてことを思わず考えていると指を2本きれいに揃えて腕を高くあげていく

それを見て私はゾツとし、慌てて止めようとした

「ま、待ってくうちゃん…」

しかし、残酷にも修羅ごとくうちゃんはそれを掴んでいた私の腕にスナップを利かせながら無情にも降り下ろした

さながら断頭台のような勢いをもった指は私の腕を穿ち、小気味いい音を響かせる

「痛いっ！痛いよくうちゃん！」

「なにいつてやがるんだ？痛くなかったら意味がないだろう？」

嗜虐心溢れる笑顔で爽やかに言われてしまった

そして再び腕を持ち上げて降り下ろしてくる

「あうっ！お願い！もうやめて！」

「んんん？聞こえんなあ？」

「は、春樹さん！助けて…っていないっ！？」

私は部屋の前に居たはずの執事の名を呼ぶが、そこには誰もいなかった

どうしてこういうときは居なくなってるのぉっ！？

「春樹さんなら美冬さんとデートに行った…お前の味方は居ないのだ！」

「そ、そんな…」

まさかこんなときにバカツプルスキルが発動していたとは…今の私は完全に孤立していた

そして弟は、他の女子ならイチコロ…になるかわかんないけど少なくとも私はイチコロになる素敵な笑顔で

「さあ…断罪の時間だ…心行くまで楽しむがいい」

「ひう…」

死刑宣告を告げた

「あつ…あつ…」

ビクリビクリと痙攣する

「次にちゃんと自分で起きる癖つけろよ?…たくつ…」

だらしなく涎をたらしながら赤くなった自分の腕を見て咳く

「汚されちゃった…」

「とおっ!」

「痛いっ!」

猫だましにチョップされ、デコピンと3連コンボを受けて今度こそ私は沈んだ

「ただのしつぺで何が汚されちゃっただバカ」

「…こんなにも乙女の柔肌をいぢめた癖に」

しっぺ地獄で赤くなつた腕を撫でながら起き上がる

まったく…いくらなんでも姉に対して手加減とか遠慮が無さすぎるよ

暫くはずつと痺れた痛みを引きずりそうだ

「昼飯冷める前にちゃんと降りてこいよ？」

「分かったよ…もう眠気ないよ」

「どうだか…」

むう…そんな言い方無いでしょうに…というか私の威厳とかいったいどうなってるんだろう？

部屋を出ようとしていたくうちゃんは何か思い出したように振り向いた

まだ何かあるのかな？

「またボケてその格好で来んなよ？ちゃんと服着てから降りなよ
そんな貧相な身体見ながら飯は食いたかねえからな」

「へ？」

欠伸をしながらドアを閉めて出ていくくうちゃんに言われた事

自分の今の格好を見下ろしてみる

そこには下着とブラジャーだけ

.....

昨日服着て寝るの忘れたあーっ!!

というかくうちに見られたあっ!

後、確かに私の体つきは他の同年代の娘に比べると発育が遅いけど貧相とか失礼でしょーっ!

…でもくうちに见られるのならいいかも…

私は暫くの間、ベッドの上で恥ずかしさのあまり転げまわっていた

その後、さっさと降りてこいとくうちに怒られたのは言つまでもない

SIDE空牙

「むはー！くうちゃんまた料理の腕上げたあ？」

旨い旨い言いながら俺の作った炒飯にがつく姉さん

もうちつと落ち着いて食べような？

なんか少しこぼしてる気がするし

まあ旨いと言われて嬉しいっちゃ嬉しいんだがな

「でも、たいして作り方変えてねえんだが…ふあ…」

また欠伸が出る

まったく…ゴミ掃除のおかげで一睡もしていないんだよ

おかげで眠い眠い…

姉さんじゃあるまいし、長時間寝るような質じゃないけど流石に一日中眠ってしまいたいと思えるなあ

「あ、くうちゃん今日私出掛けてくるんだけど」

「なんだ男でもできたか？」

「違うよ！私はいつまでもくうちゃん一筋だよ！なんならデートしてもいいんだよ！？」

「ぶはっ！」

何を言っているんだこいつ…思わず飲んだコーヒーを嘔いてしまったじゃねえか

直ぐにテーブルをタオルで拭きながら変なことを口走った姉を睨む

「ってそうじゃなくて…ちょっと今日は用事で帰りが遅くなるの」

「遅くなるってどれくらいさ」

「ううん…夜中とか？」

「マジでか？母さんには何て言えばいいんだよ」

「もう母さんには帰りが遅くなることは伝えてあるよ？だから今日のお夕飯はいらないかも」

「…変な遊びに手を出したわけじゃねえよな？」

あまり姉さんは帰りが遅くなるような真似はしない人だから心配になっってしまう

男がいる訳じゃなさそうだが…

姉さんは身体は貧相でも顔は言い方だと胸を張って言える

だから無駄に言い寄る男とか前から居たんだよ

来年にゃあ姉さんは大学生になるから更に増えるだろうな

やっぱり姉さんが心配だ

と、姉さんがジッとこっちを見詰めてくる

「なんだよ？」

「なんかくうちゃんって私に対して過保護だよね」

過保護…なの…か？

いまいちそんな気がしないな

「くうちゃんって私のこと好きだよね？」

「そりゃそうだろ？今さら何を」

「うーん…そういうのってブラコン？って言うのかな」

「ぶはっ！げほっごほっ！」

またこいつはなんてことを言うんだ

折角淹れ直したコーヒーをおじゃんにしてしまった

拳げ句氣道に詰まってむせた…肺が痛え

「べ、別に俺はブラコンじゃねえし！」

「おお、ツンデレ」

「ツンデレでもねえっ！」

はっとして別の方に視線を向けると

扉の端からこちらを見るメイドが居た

「空牙様…」

「千夏さん！違っつて！ああっちよっ！逃げるなあっ！」

「ごちそうさまあ！くうちゃんお皿洗うのよろしくねえ？いつてきまーす」

「オイコラバカ女！皿洗えよ！それぐらいのことも出来ねえのか駄目女！」

どたどたと逃げるように走っていく姉さんをつまえることも出来ず、玄関の開く音で逃がしたことを悟った

はあ…なぜこうなるんだ…

トボトボと居間のソファーに座ってテレビを見る

「…千夏さん…食器洗ってくださいね？」

「ギクッ」

こっそり俺の座るソファの後ろを通ろうとするメイドに言葉を掛ける

「…でないと美冬さんと母さんにチクリますよ？……盗撮してる
こと」

「な、ななな、なしてそのことおっ！？」

言葉遣いがおかしくなるほど動揺しちゃってまあ

「洗ってくださいね？」

「分かりました！その代わりに他言無用ですよ！？」

返事を聞かずに台所に向かう彼女を視線だけで見届ける

このネタはまだ使えそうだな…

彼女が皿洗いをしてくれるので暇になった俺はリモコンを掴んでテレビのチャンネルを変えていく

「…ふん…馬鹿が…」

あるニュースに変わった瞬間思わず漏らしてしまった

それはある路地にて男性4人と会社員1人が惨殺されたことを報道している

そのうちの社員の死を悲しむ社長がコメントしている

どうせ駒が減っただけだろうが馬鹿め、そんな悲しむ演技なんていらねえんだよ大根役者

「次はてめえの番だ…社長なんて言われんのも今のうちさ…」

欠伸をしながらテレビを切って俺はソファーに寝そべる

「空牙様？こんなところで寝られますと風邪を引きますよ？」

「秋絵さんか…大丈夫…仮眠とるだけですから」

眠らないで活動するのはホントに疲れる

姉さんじゃねえが少しは英気を養う為に俺は瞼を閉じた

SIDE 美津芽

ありとあらゆる手段を使い、警察の知り合いを通して得た情報を頼りに私はある場所の前に来ていた

そこはある人物の住むアパート

密輸のプロ、仕入れるのは武器だけでなく機密情報までを取り扱う

通称、支配人

接触するにしても戦闘に入る…というのは無いほうがいいんだけど…

というのもこういう理由かは大体察しがつきそうだが、いろんな人が張り込みをしている

というか居すぎてどうすべきなんだろ…

姿を現さないのは監視か、はたまた仕事を再び依頼するか

もしくは知りすぎた彼の息の根を止めるためか

「ぐう…神経が磨り減る…」

警察の関係者は分かるがド素人の奴やヤーさん、ガチでヤバそうなプロの人がいるどころか世界政府や国家連合お抱え魔法使いまでいる…

どうしようホントに…

本気でヤバそうな人なんて注意しないと分からないし

おまけに魔導師達…魔法使いやら式神使いやら…錬金術使いに、呪術使い…^{パラディン}げ、聖堂騎士みたいなのもいる…

なんでここだけ魔境になってんの…

あ、呪術使いの使い魔が聖堂騎士の使い魔に消された

もおおう…そこで戦いが勃発しそうだよう…

暴れたら警察関係者だけじゃ抑えられないって絶対…

下手な魔法は使えない…

折角誰にも牽制されることなく見てるのに…

私の魔法の一つ第三の目を使いたいとこなんだけど…呪術使いに目の敵にされそうだ

「あまり効率はよくないけど…遠くから見てみるか…」

一旦この場を離れようっん

こんな魔境にいたら胃薬のお世話になる！

「と言うわけで屋上に来ましたよっ」と

少しばかり離れたビルの上に来たわけだけど…そこであらまびつくり

「誰だよお前…」

「あ、あはは…」

なんと世界政府の関係者がスナイパーライフル使って張り込みしてました

というか私の隠行陣符見抜かれてる…

爪は今はポーチの中だから戦ったら勝てないじゃん

見た目は意外にもくうちゃんと同じ年頃の女の子

符を見抜かれてるのはきつと簡単な対魔導師手術を受けてるんだろうけど

「いやあ…ちよつと空を見に…」

「そんな白々しい嘘が通るか…」

「うん…だよね…あはは」

「私の邪魔すんなよ…」

あれ？なんもしてこない？

どうなってるんだ？

「あんたも支配人目当てだろ？」

「え、あ、うん」

「魔導師だろ？何だか様子がおかしいんだ…ちょっと見てくれないか？」

といって望遠レンズから離れる少女

様子がおかしいって…なんのこっちゃ？

私から見てそんなことはないと思うのだけれど

「後ろからグサリッ！…なんてことしないよね？」

「当たり前でしょ！」

「それじゃ失敬して…」

レンズを覗き倍率を確かめて

「…？」

なんだ…？なんかがおかしい…何かがあのアパート周辺に起きてる…

一度離れてポーチを開いて何枚も札を出す

「珍しいな…符術使いか？」

「いやいや私は魔法使い…魔法陣術使いの方がしっくりくるかな？」

魔導師の中ではかなりというか凄いどマイナーだけど特化型魔術を使うには一番効率がいいとされている

「展開…設置…固定…」

札が舞い、千切れ、宙に魔法陣を描く

ポーチから真つ黒な長手袋…爪を嵌めて更に一枚の札を出す

「我が法に従え…接続…第三の目開眼！」

両手を前に出して陣の中心に札を投げ入れるとバチリと音を立てて燃え尽きる

すると陣は形を変えて目の形になる

「目よ…真実を視界に収めろ」

視界に収めたアパートのある風景その全てを見抜く！

「くっ！」

目が弾ける

陣は全て燃えてしまった…だが…

「おい…どうだったん…」

「物凄いノイズが掛かってた…たぶん虚無属性の結界か、異界を展開してる…たぶん後者」

虚無属性は他の属性全てに負けるけど全てを無効化するよくわからない特性を持つてる…だから

「もしかしたらだけど…あのまわりの人達に知られずに会えるかも」

「ほんとか!？」

「うん、虚無属性が弱いって言われるのは何かに満たされやすいって事なの　全てを無くせる分、何もないところにまた何か注ぎ込めるから…あそこの異界はわざといい加減にして何重に作ってる…異界は独自の世界の法則を持っててあそこは何か一定の行動を取ったら強制催眠で常に監視する感情しか持たせない…あそこにいる人たちは自分を取り込まれた事に気付いてない…『監視』するということ考えしか持ってないんだ」

「そこまで分かるのか…」

「私の第三の目は遠目と真実の情報を取り込む特化魔術だからね…」

ふうつと息をつく

問題は、異界になんも対策無しに入るとあの異界のルール、強制催眠に従わされてしまう

「なら誰にも会わずに兄さんに接触でき」

「ちょいまち…兄さんだって？」

三爪目は魔法を行使する（後書き）

.....

世界観とか設定わかんねえよバカヤローと思った方々…

すいませんでした…

実はわざとです

作中で誰かがポツリポツリ言っていき、彼らが説明していくからです

そんなテンションなんです

後は桐崎家のメイド三姉妹＋執事

彼らは桐崎姉弟の癒しなのです

ただし皆、正確に難があります…

執事の春樹

甘いマスクに甘い声、全身からマイナスイオンが出てそんな人
メイドの美冬にゾッコン

甘やかしやすく、美津芽のせいで苦勞する

意外にも戦闘能力自体は高いが優しすぎて戦わない

長女の美冬

エロい

なんか幼い

執事の春樹にゾッコン

小柄

元メイド長

美津芽があんな性格になった元凶

次女の秋絵

エロい

背は普通

凄い足が早い

実は空牙の貞操を狙っている

空牙の高校にある空牙ファンクラブの会員
隠れきよぬー

三女の千夏

エロい

盗撮が趣味の危ない人

実は空牙の貞操を狙っている

さらにドMで空牙にいちめてもらいたい

姉妹の中で最もグラマラス

背がデカイ

絶対に桐崎両親は人選ミスしたんじゃないかと空牙は常々思っているに違いない…

美津芽中心の話ですが、この次も姉さんのターンですね

弟は暫く寝てます

では次話にて…

三爪目は爪を振るう（前書き）

ヒヤッハアーツ！

六話目だあつ！

んん？間違えたかな…？

うわらばっ！

三爪目は爪を振るう

SIDE 美津芽

今この子は何て言ったの？

「え？あ…実は…」

「実は…？」

凄いもじもじしながら言い悩む少女

さつきまでやや固い印象だったので急に女の子らしい仕草も増えて可愛らしい

「あの…この事は誰にも、特に世界政府の関係者とかには言わないでくださいね？」

「ああー私は国家連合お抱えの魔導機関管理する学校の高校生だけど…」

現在世界は、世界政府、国家連合、ギルド協会の三大組織が担っている

特に世界政府と国家連合は血で血を洗う歴史を繰り返すほど関係が悪いんだけど…

「いや…私は世界政府軍は退役したばかりだからいいよ…で、さっきの話だけど」

「うん、これも何かの縁だし言わないよ」

そもそもそんなこととしてどうするの…

「実は…支配人は私の兄なんだ…名の知れた犯罪者の家族を持つせいで軍と折り合いが悪くなって…だから先月退役したんだ」

なんとという爆弾発言…

そりゃ軍に居づらいことこの上ない

「兄さんは元々レジスタンスへの物資の横流しや、情報を明かして何とか悪政を敷く政治家を失脚させようとしてた人だから…どんな人が会いたくなって…」

「でも姿を現さないからずっと会う機会を探してたんだ」

こくりと頷くと早く会いたい一心か、荷物を纏めようと動く

だけど、私はあることを思い出して彼女を引き留める

「どうした？まだ何かあるの？」

「あの異界に入るにはある程度対策が無いと強制催眠に掛かっちゃうって、異界は現実と違う世界だから『兄に会いに行く』という催眠でずっと幻を見せられちゃうよ」

「そ、そうなの？」

「異界は結界と違う意味で厄介だし、見掛けるのは少ないからあまりその知識に明るくないでしょ？…それにあの魔境に別の厄介事があるの」

そう…やたらと腕のたつプロ達のこと

特に聖堂騎士と呪術使いは本気でヤバイ

恐らくあの2人は異界を既に攻略済みだ

それぞれが敵対関係だから地味に使い魔が小競り合いをしていた

私達がもし堂々と支配人に会いに行くと絶対絡まれる

めんどくさいので絶対に回避しないといけないことだろう

いかにしてその2人に接触することなく異界を抜けるか…

たとえば目の前の彼女と共に رفتても勝てそうに無い

異界は何とか出来そうだと、あの2人を抑える第三者が欲しい…

自分の知るなかでは1人しか思い付かないけど

「仕方ない…怒られるのを承知で呼ぶしかないか…」

「??」

「大丈夫、私はあなたのお兄さんをどうこうするつもりは無いわ…ただ情報が欲しいだけだから　その為にあなたに手伝って欲しいんだけどいいでしょ？」

「分かった…何て言うかあなたってあまり人を傷付けることが好きそうな人じゃなさそうだし」

傷付けるか…

パパの復讐の為という黒い感情でここまできたのだ

誰かを傷付ける為の準備だなんて考えつかないだろう

ちょっと変な気持ちになったけどとにかく私は携帯を出して連絡を取る

そして支配人に会ったための作戦を練るのだった

S I D E o u t

もうすぐ夕方になろうという時間

あるアパートの近くに2人の人物が潜んでいた

1人は妖艶な雰囲気を出す女性

ライダースーツの上からでも分かる程のスタイルを持つ彼女は今そこ
こぶる機嫌が悪かった

何故なら彼女が放つ使い魔が悉く消えていくからだ

あのアパートに例の人物がいるのはわかっているのだが、会いに行
こうにも会いに行けない

会うとしても彼女の場合は彼を自分が所属する組織…所謂ギルドと
呼ばれる請負業に引き込むだけだ

別に害を与えるわけではないが周りがアレなので出れるに出れないだろう

わざわざ中々高度な異界を張ったのに家から出れない原因がいるのだから

さっきの使い魔を消した相手が原因に一役買っているのも分かっている

そいつのせいで自分までその原因になるとは思わなかったが

そしてもう1人

何処か聖職者を思わせるような格好をした穏やかそうな男性

彼はただただ忠実に任務をこなし、それが世の中に貢献するのだと信じている

しかし先程から呪術使いの使い魔がこそそこそしていることに気付いた
もしかすると今回の目標を保護しに来た何者かと判断

彼は、上役から目標の人物、支配人を始末する事が任務なのだ

ならば、呪術使いの使い魔を接触させるわけにはいかないだろう

この異界の性質が自分に牙を向くように助言されては堪らない

このままどうすべきか…

彼は、考え続ける

「「！」」

そんな2人はもう1人、誰かが侵入してきているのに気付いた

それは唐突にアパートの入り口に降り立つ

真っ黒なコート、フードを被っているせいで顔は分からないが体格から男

それが悠然とアパートに侵入しようとしていた

2人は直ぐ様行動に出る

「止まちなさい！」

「動くな！」

女性は、銃を

男性は、剣を

それぞれ構えてアパートの前に躍り出た

黒いコートの男はそれを見ると超人的な跳躍力でその場から離れていく

2人はなんの疑いもなくそれを追いかけた

もしかすると支配人絡みで己の敵になるかもしれない

ならばいつそのことここでまとめて始末する為に

黒いコートの男は自分を追い掛けてくる二人を見てフードの中で不敵に笑った

ある場所を目指して黒いコートの男、桐崎空牙は駆けていく

SIDE空牙

姉さんの作戦通り、あるビルの屋上を目指し続ける

全く：折角の休日に電話があるから何事かと思ったたらいきなりこんな労働を強いられるとは

姉さんは今度またお仕置きしないといけないな

しかしまあ、こっちは変身してないが、それでもふざけた跳躍力と脚力でビルからビルへと移っているのによく追い掛けること

何か神父っぽい奴はパツと見天使のような翼を出して、ナイスバディだねーちゃんはデカイ蛇に乗って追い掛けてくる

魔導師の種類が違っただけでこつちも移動手段が違っんだな

と、目標のビルに辿り着く

「肅正の光よ！」

ちよっ！いきなり神父モドキが光をぶっぱなしてくる

それを何とか避けて、姉さんの施した仕掛けに向けてナイフを投擲
ナイフは1枚の紙に刺さり燃やす

すると神父モドキとねーちゃん、俺を中心に大きめの結界を展開した

「これは…」

「罠…」

二人は二重三重に出てくる結界に目をくれずに警戒する

姉さんの言ってた通り油断するわけにはいかねえな

「ふむ…君達の目的は大体予想が付く…ならば生かす必要はない」

翼が置まれるとそれは1枚の盾になり、神父モドキは光の槍を取り
出す

「それに彼が都合よく結界を張ってくれたお陰で誰にも迷惑をかける
必要がないみたいね」

蛇が消えていき、中からアサルトライフルを2丁も出して構える

見たことの無い型だ…改造してるってことならあれは何らかの呪術がかかってるかもな

神父モドキが聖堂騎士、ねーちゃんが呪術使い

肌で感じて分かるがはつきりいつてめちゃくちゃ強い

無理をする必要は無いが、殺すつもりでいかなきゃ間違いなく死ぬるな

とにかく時間かせぎに付き合ってもらおうとするかな

両腕の袖を通って出てきた黒いバタフライナイフを出して俺も構えた

(さて…ド素人の俺が変身せずにどこまでやれるか…)

三者は生き残りを賭けて誰が立っていられるかな？

(こつこつ賭けは嫌いじゃねえッ！)

そして俺はナイフを振るう

SIDE 美津芽

「よし…いくよ」

「うん」

今から異界の法則に逆らってアパートに行く

やることはアパートにいる支配人と接触して別の場所に逃げることだ

安全な場所に離れてもまだ油断できないのである場所に匿う

とにかく接触しなければ始まらないし、支配人と彼女を逃がした後
に私はくつちゃんを助けられないといけない

「！始まったみたい」

「！」

さっきくつちゃんのためにあらかじめ設置していた結界は非常に頑
丈だが、長く展開できないので時間制限がある

時間は30分

それだけあの2人と戦わないといけないことになったくうちゃんに
は謝っても謝りきれないなあ

一気に駆け出してアパートに近付く

「ああー…部屋ってどれかわかる?」

「それなら一番奥のそこ」

廊下を駆けていき、彼の部屋に後ちょっとといつとこ

目の前を銀閃が迫る

「ちょおっ!」

「!」

後ろの彼女が私事掴んで伏せる

顔をあげると女性型の中身の無い鎧がロングソードを構えて立ち尽くしていた

「ちいつ!雷よ!」

札を投げ付けて牽制する

札は魔法陣を描き、中心から雷が放たれる

しかし、それを剣の一振りで打ち消されてしまった

「ああもつめんどくさいい！」

まさか聖堂騎士の使い魔、しかも戦闘に特化したのが出てくるなんて！

最後に保険として置いてあったのか！

見事に道を塞ぐように配置されたその使い魔は、今にもこちらに挑みかかりそうな勢いだ

「倒さないと無理ってことか」

「聖堂騎士の使い魔と戦うのは初めてなんだけど……」

彼女の言う通り私は爪に施された魔法陣を発動させて構えた

「私が前衛をやるから後衛をやってくれない？ええっと……」

「真紀、間柱真紀よ」

「うん、私は美津芽、桐崎美津芽！よろしくね！」

そう言えば名前聞いてなかったなあ……なんてことを思いながら私は

使い魔に向かって走る

接近した瞬間、私は腕を下から撫で上げるように振り上げた

爪の魔法陣を起動したことにより、空気中の魔力を巻き込みながらそれは3本の鋭い爪が象られて使い魔を切り刻まんと迫っていく

使い魔は気付いたのかそれを剣で受け止めて捌く

結構本気で腕を振ったんだけどあっさりと捌かれたなあ…

とはいえ初めから人を越えたスペックを持つ相手だから当たり前かだからといって退くつもりはない！

「はあああつ！」

両腕に発生させた爪を駆使して次々と連撃を叩き込む

金属音を響かせて辺りに火花を散らしながら

相手は人外の力を持ち、体格さか、背の高い相手は勢いが少しずつ増し始めた

手を休めてるわけではないけど様々な条件が重なり押されだす

「っ！」

甲高い音を響かせて強く右腕を弾かれた

体勢が崩れる

右腕の肩が外れそうな強烈な一撃だったせいで少し顔をしかめる

それを好機と見た使い魔は必殺にと大上段に剣を掲げた

本当なら私はここで真っ二つになるはずだろう

本当なら

連続した炸裂音

横を複数何かが空を切る音を聞く

そして目の前の使い魔の剣、掴まれた柄、手首

そこを思い切り金属音を鳴らして弾かれる

後ろに仰け反るようなカッコ悪い姿勢になったのは後ろの真紀ちゃんのお陰だ

「ありがとう！」

「どういたしまして」

両手にマシンピストルを構えた真紀をチラッと見た後体勢の不安定な使い魔の前に大量の札を投げて素早く陣を敷く

「獣の血肉…表すは、3つの爪…契約された獅子よ！我が願いに答えよ！」

無理矢理右腕を押し戻して大きな陣に腕を突き刺す

すると陣の一部が捻れていく

使い魔は脅威を感じたのだろう

私の腕を斬り飛ばして陣を散らし、不発させようと剣を振ろうとする

「だけど後一步遅かったね…！」

捻れた部分が引き絞られた弓のようにそれが放たれた

「獣王の三爪…」

捻れ歪む部分から私の爪より遥かに大きな爪が必殺の一撃を見舞う

防ぎ、捌けば良かったものを陣を散らすことにしようとしたのが運のつきだ

身を守ることも出来ずに一本目の爪が剣をへし折り

二本目の爪が片腕と片足を跳ねた

「チェックメイト…！」

三本目の爪が使い魔の体である鎧を深く抉り、撥ね飛ばす

すっ飛んでいった使い魔は壁に激突してずり落ちてくる

淡い輝きを放っていた鎧は文字通り大きな爪痕を残して罅割れていた

まだ立ち上がりとしていたが、輝きを失うと同時に動きが止まる

なんとか倒したか

「はあ…ってあいたたた…」

「大丈夫？」

「脱臼とかしてないからなんとか」

ちょっと気が抜けてせいかわ腕が今更ながら痛い…

帰ったら湿布貼ろっ…

三爪目は爪を振るう（後書き）

ごめんなさい

弟は姉の手によりログインしました

前回寝てるとか言っただけど結局起こされてしまいました

まあ、彼は姉にお願いされるのを無意識に喜ぶシスコンだからいいんでないかと

後、前回の後書きに性格を正確と書いてたりと誤字が目立つようになったしまいました…

自分は大学生の身なんで日々の疲れからどうも携帯の癖に誤字脱字が増えてしまいます

その辺はほんとに勘弁してください…

さて、弟を差し置いて姉 + α が先にバトっ ちまいました

そして元軍人の子はほんとにここでお亡くなりになる予定でしたが、そうバカバカと安易に死んでいくのはちょっと作品としてどうかと思ひまして姉サイドのキャラになって貰うことになりました

ただ急遽生き残らせたせいでキャラが掴めん！

でも頑張っています

どうもサノブでした

次話にてまた…

弟は躊躇する（前書き）

7話目だよぉゝ

無理矢理感がひどいっす

ご注意を

弟は躊躇する

SIDE 美津芽

「さてと…時間も無いし、早く会いますか」

「うん」

支配人が居るであろう部屋のドアに手を掛けようとして

「動くな」

ジャキツと頭に銃を突き付けられる音、真紀ちゃんも突き付けられたように後ろを振り返ることが出来ずに武器を置いて両手を小さく上げていた

あちゃあ…まさかこんなところで詰めを誤ったか

聖堂騎士の使い魔を倒したくらいで気を抜いてしまい後ろからくる相手をまったく警戒出来なかったとは

「さぁとりあえず座れ」

「「!？」」

言葉と共に気付いたら部屋の中に立っていた

は？ 一体何事？

殺風景な薄暗い部屋にほんのすこしの荷物に

「パスポート……？」

床に散らばるものを見て何かおかしいことに気付く

「いいから座れって……いきなりこの部屋に脳みそをぶちまけたくない」

その言葉に慌てて直ぐに床に座る

視線が低くなったことでパスポートに書かれた名前を見て私は盛大に勘違いしていた事に気付いた

「あ、あの」

「ん？」

「あなたは支配人ですね？」

その言葉に隣の真紀ちゃんが驚いた顔で振り返ろうとする

が、凄い力で床に2人して這いつくばらされた

何で私まで…

「ちっ！折角外国に移って隠居しようとしてるのに…お前らも勧誘か口封じの口か！？」

「ちよっ！タンマタンマ！話を聞いて！」

頭にゴリゴリ銃を押し付けられてさらに恐怖が沸く

はつきりいつて怖い

私はくうちゃんと違って肝が据わってる訳じゃないから命の危機が迫るとホントに身体の震えが止まらない

まだ目的も復讐も果たしてないのに…！

「待つて…！私は間柱真紀！この名前、貴方なら分かるでしょ！？」

こんな状況でも強く声を出せる真紀ちゃんは凄いな…軍に入ってたからやっぱりこれぐらいの修羅場は平気なのかな

「ま、き？…お前…真紀なの…か？」

「そっだよ！信じられないなら貴方からもらったロケットだってちゃんと今も持つてる！」

私の顔の前に握った手を床に置いてその手を離すと、中から少し大きめの百合の意匠が施されたロケットが置いてあった

「く…だがお前が本物かどうかなんて…」

「私が知る貴方は1人も人を殺せない…今だって銃が震えている…」

確かに少しカチャカチャ小刻みに銃の金属音が鳴っていた

強く押さえ付けたのは震えを隠すためなのか

「銃を離してください兄さん…私たちは貴方の味方です」

「…くそっ…」

ゆっくりと、銃が頭から離れていく

た、助かった？

「う、うええ…し、死ぬかとおもったああああ…」

あんまりにも恐怖に目から思わず光るものが流れ続けた

さっきの使い魔との戦いで一杯一杯だったとはいえ、ちょっと情けないなあ

「だ、大丈夫か桐崎？」

「んー…生きてるって素晴らしいー」

「ちょっと！時間が無いんじゃないの？」

「ん、大丈夫…今立ち上がるから」

目をガシガシ擦ったあとに顔を2、3回顔を叩いたあとに振り向いて支配人と面を向かう

黒い長髪に無精髭を生やした長身の青年

背も非常に大きく、さっきの力の強さを考えると多少は鍛えてるの
だろう

「初めまして支配人…自己紹介したいところだけど先ずは最初に貴方をこの場から安全な場所に移動させるわ」

「安全なところだと？」

怪しげに聞いてくる彼の信頼を得るのははっきり言って難しい

ここはちよつと真紀を使って早めに移動の決心をさせないと

時間も半分過ぎた

早めにくうちゃんを連れ出さないと…

「真紀ちゃんは今貴方に積もる話もあるのだけれど、このままじゃいずれば異界を突破されちゃいます　だから私の用意した隠れ家に行つて貰いたいんです」

「それが畏でない証拠は？」

「そうですね…」

うーんどうする？信用してもらつには…

「兄さん…ここまで私がこれたのは彼女のお陰だから、今は彼女の言うことを聞いて…」

「だが…」

中々に渋るなお兄さん…そうだ

「貴方がこの異界を作ったんですね？」

「そうだ…俺は界術使いだからな」

驚いた

魔導師の中で最も強力な使い手は、大きく分けて2つある

1つに神法使い

祝福儀礼等を通して神の力の断片を行使するとされる

聖堂騎士はこれの分家だ

そして残るひとつが彼のような界術使い

世界の法則に従うことなく逆にねじ曲げてしまいう程の力を持っている

よくいるのが世界を自由に転移する世界旅行者と呼ばれる者達だ

彼は魔導師達の頂点の1人だったのか…

道理でこんなハイレベルな異界を平気で重ねて展開出来るわけだ

私達が急に部屋に転移させられたと思ったのはこの異界の強制催眠を使つて無意識に移動させたんだ

それじゃ知覚出来ないわけだ

異界を作つた本人なら異界のルールを誤魔化すだけの私では異界に引きずり込むぐらい造作もないのだろう

流石界術使い！

「生の界術使いなんて初めて見た…！」

「感動に浸つてるとこ悪いんだが話の続きを」

「あ、ゴホンツ…えつとその異界がですね？私達以外に攻略していた人達が居たんですが」

「…呪術使いと聖堂騎士だな？そいつらがどうした」

「彼らを助つ人が引き付けてまして…今からなら何とか抜けだせられます　ただし、後、10分くらいで彼らが引き返しに来ると思うんです」

「だから今から抜け出せと？」

「兄さんお願いします」

妹が頭を下げたので自分も頭を下げる

もう接触するために一度引き離してしまっているのだ

呪術使いと聖堂騎士はどちらか帰ってくれば絶対に接触を図るはずだから彼にとっては最悪の状況だろう

「…分かった…ここから抜けだそう…いい加減この生活は息苦しくてかなわん」

「そうとわかればその荷物を持って早くいきましようか」

「よいしょ…ここからこの地図を使ってバツ印のところに行ってください」

アパートの近くにあるマンホールを無理矢理こじ開けて地下道に降りる

紙切れを真紀ちゃんに渡して私は地上に再び出る

「美津芽ちゃんは何処に？」

「ん、助っ人を助けに行かないと…大丈夫、ちゃんと待ち合わせ場所に行くから…お兄さんと仲良くね？」

私は重い蓋を元に戻して急いで離れる

支配人がいない分異界は崩壊を始めている

しかし、ただ崩壊させるのではなく異界に居たものを帰宅させるという催眠を掛けるので私は急いで異界から出ていけないと

「くっちゃん…待っててね」

SIDE 空牙

弾丸、光、爆発、雷

ビルの屋上というこの狭い空間が生き残りを賭けた戦場と成り果てている

「このっ…！」

呪術使いが手榴弾を放り投げる

爆発と同時に中から黒い蛇が落ち、全てが床に溶けていく

それらは呪いという地雷と化していったのだ

まったくめんどくさい

まあ、俺にはそんな小細工は一切通用しないんだがな

というか聖堂騎士が勝手に呪いを浄化してくれてるから引っ掛かる
ことがない

十字架を模した投擲剣が数本迫るのを視界に入ってくる

俺は足で2本蹴り落としてその2本を拾うと残りの剣を叩き落とす
その後に銃声が聞こえると同時に頭を下げた二人にそれぞれ剣を投

げつける

戦いは激しさを増し、俺は加わることが出来ずに攻めあぐねていた

それにしても不味いな

俺ははっきり言って戦いに関してはド素人だ

2人を遥かに上回るこの化け物じみた身体能力が唯一の救いだったのだが、やはり戦いのプロ相手には敵わない

俺だけが今のところ押されきみなのだ

こりゃ一番最初に死ぬのは俺になんのかね

「...やべっ...!」

思わずそうこぼしたがそう思わざる得ない状況に陥った

神父っぽいおっさんの光弾、呪術使いの手榴弾2個が俺に集中的に迫ってくる

やっぱ雑魚から片付けるもんか...!

こうなったら窮鼠猫嚙むよろしくやってやるよ!

「な！」

どっちの声か分からないがそりゃ自分から突っ込んでくる奴は普通はいない

それでも俺は飛び込み、宙で手榴弾を掴む

それを爆発する寸前まで光弾の中を進行方向とは逆、つまり神父っばいおっさんに向かって走る

光弾が体を掠り、血が流れる

痛みに手榴弾を取り零しそうになるがそれでも足を止めることはない

そろそろ手榴弾がやばい

俺は神父っばいおっさんに2つとも投げ付けた

「くっ！加護よ！」

十字架型の剣を放り、光の槍で突くと巨大な壁へと変貌した

手榴弾は轟音をたてて爆発する

爆炎の中から呪いを内包した蛇が壁に当たり、侵食し燃えてしまう

だが呪いはおっさんにまで届くことはなかったようだ

「！」

風を切り裂くような音

俺はバックステップしてそれを避ける

呪術使いのねーちゃんのライフルから撃ち出す弾丸も呪いまみれだから、着弾する場所から一瞬にして燃やし尽くし塵に還していく

ホントにさっきからえげつないな…

そんなねーちゃんにおっさんは槍から光弾を大量に放った

「くうっ！？」

しめた！呪術使いは今、奴に釘付けだ

周りに残る呪いを避けながら生身で出せる最速を持って走る

丁度よく光弾を防ぎきった後で行動が出来ない呪術使いの肩を掴む

ちょっとメキリって鳴ったけど聞かなかった事にしよう

彼女に首に向けてナイフを走らせようとする

「このまま2人とも逝きなさい」

声に反応して視界を外すと光の槍をとんでもない大きさに変えて叩きつけようとしているおっさんが見えた

「こんっ…の！」

地面に足をつけて無理矢理その場で横っ飛びする

無理な体制で踏み出したのか、足の筋肉が千切れるような痛みが襲ってきた

ああもうこの年で断裂は勘弁してくれよ…

とりあえず床に転がるように倒れて立ち上がろうとして

むに

「あ？」

「……………」

……何故か呪術使いの双子山の片割れをその、なんだ……

「……すまん」

「あら敵なのに謝るの坊や？」

あ、顔見られた……

「隙だらけだぞ！」

「ちいっ！」

あの巨大な槍が今度はフルスイングで襲い掛かってきた
やべえな……避けられな

「十二式……呪獄壁画！」

「な……」

呪術使いが黒い壁で俺ごと槍から守る

なんで俺まで守ったんだこの人…訳わかんねえ

槍がどんどん黒く染まり、勢いを無くしていく

この壁、受け止めるだけじゃなく呪いで弱体化しているのか…

「これで貸し借り無しね」

「貸し借りって…別に俺は」

それでも槍の浄化の力が強力なのか、壁に罅が入る

それを苦悶の表情で防ぎ、腕を伸ばしてまで抑えようとする

「坊やはあの時に私を殺して逃げれば良かったのに、どうして私ごと飛んで避けたのかしらね」

「あのときはなりふり構ってられなかったから」

「それこそ尚更よ？別に時間の掛かる事じゃないのに」

「……………」

あの時俺は…

「坊やは人を殺したことがある目をしていたわりには殺すことを躊躇

踏していたわよ？」

彼女の腕の所々が出血する

俺は、外道畜生を殺すことに躊躇はない

だけれど、この人は？

それが過った時、俺は無意識に躊躇したんだ

この人からは血の臭いがする…人を殺したことはあるのだろう

だけれどナイフで切り裂こうとしたとき彼女の目は今まで殺してきた奴と違って澄んでいたんだ

何故なんだ？

だから槍を振り下ろされたとき俺は彼女を助けてしまったんだ

理由が聞きたいから

血が顔に掛かる

「——あ」

あの日

目の前で親父が――

「っ!!……くそっ……」

何をしているんだろうな俺は

全身から滲み出る黒い液体に俺は包まれながら忠告する

「おい、あんた」

「なに!?!この状況で私を殺せば貴方も死」

『【ちよつと離れてろ】」

「――え?」

「ガアア ■ ■ ■ アアッ!」

口から黒い極光を放つ

不思議な気分だ

復讐のためにと使わないうたこの力を守るために使うのは

極光は槍を一撃で粉碎する

おっさんは何が起きたかまったく理解してないらしい

「【ふんっ！】」

さらに身体中から黒い液体で出来た触手を出しておっさんに襲いかかる

「な、なんだ貴様は！？」

折れた槍と盾を駆使して捌いているがどちらも傷付きボロボロに果てていく

「【何が聖堂騎士だあ！オラ失せろオツ！！】」

「なんとっ…！怪物めえっ…！聖堂障壁…！」

さらに相手を触手で拘束して無理矢理引き寄せる

俺は右に液体を送り、自分の図体を超える腕を形成、巨大な拳を強く握り、障壁ごと本気で殴り飛ばしてやる

「うっ！なんてめちゃくちゃな…」

回りに衝撃波が出るほどの破壊をもたらしながら
その瞬間丁度よく姉さんの結界は消えていった

「『…やっべ…』」

おっさんは隣の隣の隣までのビルへと貫通し、吹き飛んで行った

あのビルの弁償とか俺知ーらねえ

俺は後ろに振り返ると呪術使いのねーちゃんがもう戦意を喪失した
のか銃を置いて足を投げ出して座っていた

「……………凄いわね」

『「まだやるか？」」

「いいえ、私はパス」

液体を解いて生身へと俺は戻る

「坊やは…何故、支配人のアパートに近づいたの？」

「支配人を助ける為…だとも言っておくさ」

「そ…なら戦う必要なかったわね…聖堂騎士ならともかく」

「？あんたは違うのか？」

俺は適当に床に座り込み何気なく聞いた

「私はただ所属するギルドの長が仲間に勧誘するようにと言われてたわ」

「だとすると初めから共同戦線張れば良かったか」

何だか予定と違う事になっちまったな…

しかし聖堂騎士ぶっ飛ばしちまったが…ありゃたぶん死んでなさそうだ

仕留めた実感がないからな…勘だが絶対に生きてる気がする

「くううちゃああんっ！」

「は？」

日の落ちた夜空を見上げているとすんげえ聞き覚えのある声が聞こえたので思わず振り向いてしまう

だが振り向いたのがいけなかったのだろう

もうそこにはバカ女の頭が

ごちんっという痛々しい音と共に俺は倒れた

「ぐあっ！」

「きゃっ！」

「あら大丈夫？」

弟は躊躇する（後書き）

7話目まで来ましたね

早くも7話目から手抜き臭くなりましたね

いかんですねえ

そういえば空牙の異能って某蜘蛛男の某共生体とか、血？戦線の某キャラクターとかを参考にしていますが文章力無いから気づいてる人少ないんだろうな…

後は、姉弟の弱点というか欠点が地味に露呈しました

…露呈したって言えないか

姉の美津芽ちゃんは自分の命の危機になると過剰に怯えます

誰だって死にたくないもんなんですけど、彼女の場合3年前の屋敷襲撃と父親の死がトラウマになっております

それが原因でびびり倒します泣くほどに

弟の空牙君は喧嘩とかあまりしないし、自分より弱い人しか戦わなかったので力の割りに弱いです

よって彼の攻めあぐねていたってのはあの戦いで半ば空気になりかけていたのです

ちなみに姉弟にはまだ欠点があります

そこは追々話で出てくるでしょう

後はヒロインが多いなあと空牙君はリア充だなあと脚本作る内に思っています

何かいろいろ危ないのでちょっと彼に似合いそうなヒロインの意見が欲しくなっちゃいますた

何か案がありましたら感想などにチラリと書いてくだちい

あ、地味に呪術使いのねーちゃんはヒロイン候補ですよ！

そいじゃ次話にてまた…

夜の路地に銃声が響く（前書き）

8話あーッ！

濡れるッ！

夜の路地に銃声が響く

SIDE 空牙

乱暴にドアを開けてづかつかと隠れ家に入る
足を少し引きずりながらだから歩きづらいな

「はぁ…痛ってえなくそっ…」

ほの暗い部屋に置かれたソファーにボロボロになったコートを投げ
捨てる

このコートは直さないといけないから暫く着れないな

「結構高いからショックだ…まだ着てたいし、自分で直すしかねえ
か…はぁ…」

「あら、あんまり溜め息ばかりついていると幸せが逃げていくわよ？」

「誰のせいだよ…」

ただでさえ憂鬱になるというのに新たな問題を抱える事になってん
だから溜め息もつきたくなるっての

今この隠れ家には先刻まで殺しあいをしていたはずの呪術使いのねーちゃんがいた

どうしてこうなってしまったのか、少しだけ思い出してみる

S I D E o u t

空牙が隠れ家に行く3時間前

先程まで戦っていたビルところで気まずい雰囲気醸し出す3人の人影がいた

「…」

「…」

「…」

「ひとつ聞いていいかしら？」

「…なんだよ」

「いつまでそうしてるつもりなの？」

呪術使いが指を指すのは空牙の背中

そこにはこれでもかというほどがっちりと抱き付いた空牙の姉、美津芽がいた

空牙は黙って彼女の腕を離そうとするが、華奢な体の割りに強い力で離れようとしない

空牙の人間離れた力に逆らおうとしてるのは彼女が自身を強化してるからだったりする

そんな小さな攻防を暫く続けていたが、美津芽が呪術使いを突然睨みだしたことで終わる

「くうちゃん…この人呪術使いだよ？なんで仲良くなってるの」

「仲良かねえよアホ、戦う必要がなくなっただけだ」

「そういうことよお嬢ちゃん」

美津芽に微笑むも呪術使いを快く思っていないのか睨むことをやめなかった

そんな彼女らに溜め息をつきつつ空牙は本題を切り出す

「で？一応迎えに来たってことは撤収するんだろ？」

「うん…くうちゃんがあんなことしたから早くここから離れないと」

美津芽の言葉に空牙と呪術使いは隣のビルに視線をうつす

そこには何が貫いたのか大穴が空いており、道路の方からはパトカーのサイレンの音や人の悲鳴に野次馬の声が聞こえる

自分が招いた結果とはいえ内心、空牙は恥ずかしさと後悔が今更ながらに襲われる

「とにかく！今は予定通りに撤収だ…ほら、あんたも帰っていいぞ」

「くうちゃんそれはだめだよ」

「んあ？」

何故？と言いたげになる

「私達の顔とか割れちゃってるんだからこのまま解放したら面倒よ
だから私達が身柄を確保しておくべきなんだけど」

「ど？」

「んぬううう…私達は支配人が居るから手一杯…くうちゃんが拘束

すべきなんだけど、一つ屋根の下に見知らぬ女と二人きりにさせた
くないいい…」

「なに考えてつか知らんが早くここから離れるぞ？警察のお世話に
なりたくねえ」

背中に顔を力強く埋められる事に鬱陶しさが募るが、言った通りに
警察に見付かれば言及されるのは間違いない

美津芽は泣く泣く封印の魔法陣が書かれた札を呪術使いの背中に張
り付けておく

「これで暫くは呪術は使えないわよ…くっちゃんの言うことはちゃ
んと聞くんだよ！」

「犬かなんかじゃあるまいし…」

「お手とかすればいいのかしら？」

「しなくていい」

空牙は立ち上がると呪術使いと美津芽を抱えてビル端へ移動する

それに美津芽は猫のように縮こまり、呪術使いは面白いものをみつ
けたかのように空牙を見る

「うう…怖い…」

「あなたここから飛び降りる気？」

「いつもやってることだし怪我なんかしねえ」

まあ足の筋肉が一部断裂してるがそこはもう治り始めてるから痛いくらいで済むだろうなんて考えながらビルから飛び降りた

コートをはためかせながら裏路地に向かって落ちて着地する

ビシリと音をたててコンクリートに罅が走る

着地した時の衝撃を逃しきれなかったのか空牙は苦悶の表情を見せるが、直ぐに隠した

2人を抱えたまま路地裏の奥へと駆けていく

「その右の角、突き当たりのマンホール」

「へいへいっと…警察多いなおい」

「？姿は見えないわよ？」

「耳が良いんだよ俺は…迂回すんぞ」

走り続けてひとつのマンホールが見つけてそこに向かう

そこで美津芽を降ろして力業でマンホールをこじ開けた

「じゃあまたあとでな」

「…」

「どうした？」

「私の弟に手を出したら絶対に許さないからね！？うわああんっ
！！」

そう叫ぶやいなや直ぐにマンホールの闇に入ってしまった

黙ってマンホールを戻すと何事もなく空牙は立ち去ろうとする

「あら、何もないの？」

「あんなのいつものことだからな、俺達も行くぞ」

あ、と言った後に空牙は振り向きいい放つ

「変な真似は絶対にするなよ？今のあんたを殺すなんて簡単なんだからな」

「あら、怖いこと言うのね…そうね気を付けておくわまだ死にたくないもの」

フフフと笑う姿になにか違う意味で自分は相当厄介な人物を引き取ってしまったと思ってしまうていた

（精々振り回されないようにしないと…こいつ姉さんみたいにめんどくさそうだ）

事実、空牙は隠れ家に着くまでにいろいろとからかわれてしまう

彼はげんなりしながらも隠れ家に向けて歩いていく

SIDE 空牙

「ああくそっ…ここの書類何処へいったんだか…」

思い出しながら作業していたせいか、何枚か書類を無くしたようだ

相当「ごちゃごちゃ」してるから仕方のないことかもしれない

一度きれいにまとめておいたほうがいいな…また書類を無くすとかしたくないし

「こんなに調べてまるでストーカーみたいね」

「かもな…ある意味そんなものかもしれない」

「認めるの？」

「否定できないだけだ…と、こんな時間か」

携帯の時間を確認して俺は別の黒いコートを出して羽織る

足は少しずつだが治り始めた

明日には治っているだろうな

こういうところはホントに便利な体だ

「出掛けるの？」

「野暮用だ」

バッグから姉さんの札を大量に張り付けた手錠を出して呪術使いにつけておく

これにはさらに魔力封じや、両手が塞がってる分身を守るために結界を自動で発動するらしい

他にも細かい効果があるらしいがあんまり俺は詳しくはないからな

「あなたってそういう趣味なのかしら？」

「ちげーよバカ 逃げられないようにするためだ…じゃあな」

「いつてらっしやい」

「…はあ」

こいつは呑気なのかしたたかなのか…

ただわかってんのは相手にするだけめんどくさいところか

とにかく今はやることをやるか

…俺の友達に手を出した奴らに引導を渡しにな

しかし俺は相手を殺すことは出来なかった

何故なら

「なんだこりゃ…」

舞い散る火の粉、黒く立ち上る黒煙、そしてなにかが焼けた匂い

報復するために訪れたビルが火事に見舞われていた

どういうことだ…何故こんなことになっている？

ビルの様子を見ると

「？」

黒煙に紛れて何かがいる

巨大なマントに大きな魔法使いのような大きなつばの帽子を被っているのだけが見える

あいつが犯人か？

だとしたら何者なのか確認しておくべきか？

と、路地にその影が降りていくさまがギリギリにだが視認できた

少しあとを追うとしよう

あのビルの社長が死んだか聞きたいしな

路地に入ろうとして足が止まる

突然、冷や汗が流れだした

一体どうしたんだ俺は

あそこに行くなと

まるで路地にいくなと本能が訴えている

何を今さら恐れているのだろうか？

こんなものは気の迷いだと抑え込んで俺は路地に入っていく

燃えたビルをぐるりと回るように歩いていくとそこに奴はいた

何かオーロラのような黒いベールがマントと帽子を象り生きているかのように揺れている

その隙間から覗く顔は人の顔をしていなかった

ありや悪魔か？だがなんでこんなところに？

ちらりと見えた視線の先にはあの社長がいた

助けたのかあいつは？

と思ったがどうも違うな…社長は怯えて後ずさっているから拐われたのかもしれない

「な、何故なんだ…私を助けてくれるんじゃないのか！」

『貴様は、上が使えないと判断した』

「そんな馬鹿な話があるか！約束が違う！桐崎の研究を全てやれば国家連合からかくまうと言ったのはお前だろ！」

「桐…崎…だと？」

あいつ今何て言った？

まさか

まさかまさかまさかまさかまさかまさかまさか
まさかまさかまさかまさかまさかまさかまさか
まさかまさか

アイツは

親父を売った？

何の関連があるかなんて知らない

桐崎、研究

そんなことしてるのはこの町では

俺の親父しかしていない

気付けば俺は身を隠すことなく自ら二人に近付いていた

『む…？』

「！こ、この際誰でもいい！そこのお前！私をあの化け物から助ける！」

俺の存在に気付いた社長は俺にすがり付いてくる

「お前は…親父を…桐崎…桐崎透牙を知っているのか…？」

「あの死人のことがなんだと言うんだ！お前もあいつの研究が欲しいのか！？いくらでもくれてやるから私を助け」

『【てめえ…親父の研究を誰かに売りやがったなあ！？」』

「ひっ!？」

こいつは!あの日に関与している!

激情にかられて顔を既に半分覆われていた

怒りが押さえられない

もしかしたらこいつのせいで親父が死ぬ原因になったのかもしれないからだ

腕を掴んで力任せに壁に叩きつける

「が、は…ぐうつ…その顔…まさかお前、桐崎の…」

【「お前がその名を言うなあっ!-!」】

足を思いきり踏み潰す

既に怪物の足になっているおかげで一瞬にして足が弾けとんだ

「ぎゃあああっ!-!わ、わたしの足がああっ!-」

『【…手を出さないのか?」】

こいつがこんな目にあっているのにも関わらずあの化け物は一切手を出さないから聞いてみた

なんの動きもないために少しだけ不気味だからだ

『お前が殺るなら手間が省けるだけだ…そいつを煮るなり焼くなり好きにするがいい…』

その言葉だけを残して後にいた化け物はまるで最初から居なかったように姿を消していった

恐らくあの化け物もこいつとの関わりがあつた以上関与している可能性が高いが最後まで不気味な奴だったな…

冷や汗をかくほどの重圧はあいつが出していたようで少し気分がいい

「ふ、くくくっ……はああああ…やっとだ…」

ああそうだな…少しだけ気分がいい

復讐するために探し続けてやっと見つけた

情報が欲しいが…ダメだな

「『我慢できねえ…な…』」

「う、うあああ…よせやめろお…まだ死にたくない」

【「やめろ…だと…？ふざけるなゴミがっ！お前が情報売ったせいで親父が死んだ！てめえは親父を殺したんだ！」

「あんなことになるなんて思わなかったんだっ！頼む！今までのことを話す！わたしにだって家族がいるんだ！」

【『俺にだって家族がいた！だが下らん利益の為に！自分の行いを隠す為に他人の家族を奪ったお前が最後の最後で命乞いするな！』」

一言一言が俺の神経を逆撫でする

こいつには相応の報いを受けてもらう！

左腕を掴み握力に任せて握りつぶした

ゴミのように蹴り飛ばした

右腕の肘を逆の関節に捻り折った

「【まだだ…まだ足りない…もっと苦しませないと』」

「かは…ごほっ…死にたくない…死にたくないよお…」

【「て、めえ…！つまらないことを！」

コートの袖からデリンジャーを出して突きつけてやった時だ

「動かないで！」

□
⋮
└
┌

路地の角から警察の特殊機動隊だろう人物が現れた

声や小柄な体型からして女性だろうな

ライフルがこちらに構えられてるが気にしてる場合じゃない

「そのあなた！種笠社長を解放してください！」

「解放……だあ？このゴミは部下に人拐いさせて人身売買までしたんだぞ……ゴミは今すぐ処分するんだよ！」】

「それが本当なら法で裁きます！今すぐ治療しなきゃ裁く前にその人が死んでしまいますよ！」

【「だつたら今すぐ俺が裁く……！」

頭に押し付けて引き金に指をかける

その時また耳障りなまでに騒ぎ始めた

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくないやめろたのむかぞくをのこしてしにたくないしにたくないしにたくないよおおおうわあああああああああ！！！！」

口から泡を吹き、髪が所々白髪になり始めていた

ふん…醜いな…こんな…こんなやつに…

親父は…！

「っ！ダメえええっ…！」

【「！？なにっ！？」」

機動隊が体当たりをして俺ごとつれ合い、その拍子にデリンジャ
ーを取り落としてしまった

「『このっ…邪魔をするなっ！』」

「ああっ！」

とりにいく時間も惜しい

機動隊からライフルを奪い取り機動隊を遠くに投げ出してやる

しかしそれでも羽交い締めにしようと機動隊が再び突っ掛かってくる

『「離せっ！こんな畜生を生かしてなんになる！？」」

「どんなに悪い人でもしかるべき場所で裁かなければなりません！
あなたのはただの人殺しだ！」

「【っ…っ】」

動揺してしまう

殺すことに抵抗がないから

俺は既に人殺しだから

だがそんなことは一度も言われなかったんだ

だけれど俺は止まることなどできない

目的のために俺はまた誰かを殺すのだから

今度こそ機動隊を投げ出して頭にライフルを押し付けて

「たすけてえ…………——とうさぁん——」

【「っ!?!」】

——親父……

あの日、あの時の親父の最後は…

あの死の瞬間が甦る

俺はそれを相手に同じ目に遭わせようと

——あの時の奴らの嘲笑う目が

俺は今、あいつらとオナジナンジャ？

「【っ！？っうわああゝああああっ…！！あの世で親父に…詫
び続けるおおっ！種笠あああっ！！！】」

一発の銃声が、

路地に響き渡った

夜の路地に銃声が響く（後書き）

他の小説考えてたら更新するの忘れてましたすいません

主人公の最後のセリフはとある某ゲームのセリフのパロディだったり、主人公と社長（笑）のやり取りは某ラブ&ピースでヒューマノイドタイフーンな漫画のパロディだったり

いろいろ影響されまくった内容になりました

それにしても大学生という身分は中々ハードなんですな…

自由にしてられるぶん授業は難しいし、いっぱいいっぱいにならないよう気を付けないとダウンしそうです

今回の主人公の狂気がほんの少しだけちらりと見えたというな感じでしたがどうだったでしょうか？

ちょっと自信ない…

それでも今日もまた次話に向けて書いていくのみです

話変わって恋姫が、ネギまの二次小説を作ってますが中々投稿には至らないですな

皆はどっちから読みたいですかね？

それにしても空牙くんはどこに行き着くのやら

…あ、呪術使い名前出てねえや…

じ、次話にてまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031s/>

その怪物、誰が為に力を振るう？

2011年10月9日01時03分発行